



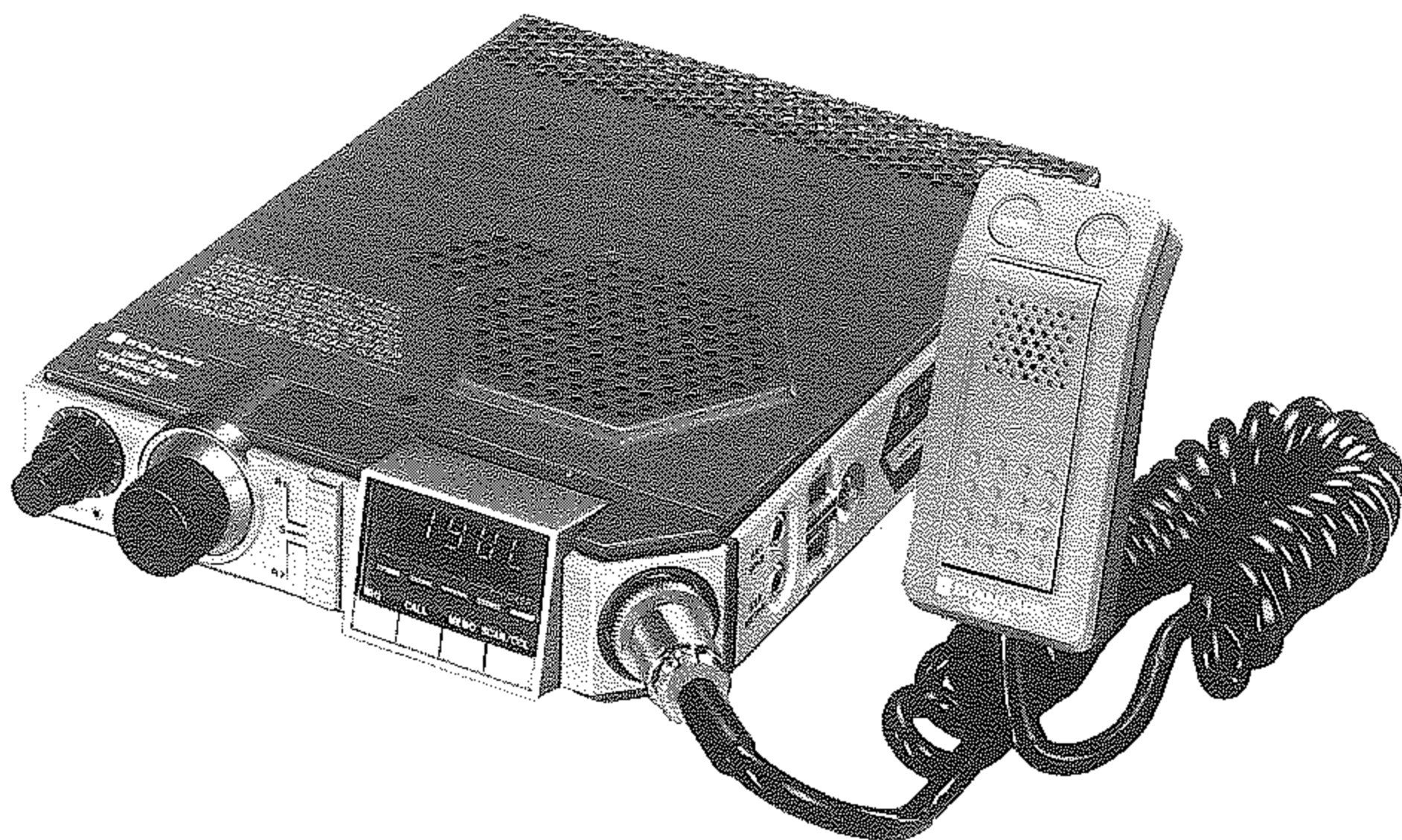
STANDARD[®]

C7900G

430MHz帯FM トランシーバー

船高感度 マイクロコンピューター内蔵

取扱説明書



日本マランツ株式会社

このたびは、430MHz 帯 FM トランシーバーをお買上げいただきまして誠にありがとうございます。

本機は、当社の厳重な品質管理及び検査のもとに生産、出荷されておりますが、万一の不審な点、お気付きの点などがありましたら、なるべくお早めにお買上げいただいた販売店あるいは弊社営業所、サービスセンターへお申し付けください。

本機の性能を十分に発揮し、末永くご愛用いただくためにご使用の前に、この取扱い説明書を最後までよくお読みくださるようお願い致します。

附属品

1. 取扱説明書	1
2. 保証書	1
3. 営業所一覧表	1
4. 回路図	1
5. マイクホン (CMP726)	1
6. モービルブラケット	1
7. DCコード (2 m)	1
8. 3.5φプラグ	1
(EXT.SPKRおよびEXT.METER用)	
9. ゴム脚	4
10. ブラケット止メビス関係	一式
{ 六角ボルト 5×20mm	4
{ ナット 5mm	4
{ 平ワッシャ 5mm	4
{ スプリングワッシャー 5mm	4
{ タッピングビス 5mm×15mm	4

目次

特 長	2
お使いになる前に	3
各部の名称と動作説明	4
取付け方法	14
操作方法	18
便利な使い方	20
定 格	24
申請書の書き方	25
保証・アフターサービスについて	25
主なアクセサリ	26

特 長

●GaAsFET使用、高感度設計

フロントエンドには、ガリウム砒素 FET 3SK97を採用。大型ヘリカルレゾネーターと組合せ、超低ノイズの RF AMP を実現させました。超小型機でありながら、大型機をしのぐ高感度、高選択度のすぐれた受信性能を誇っています。

●安定した送信回路

ファイナルブロックにはパワーモジュールを採用。アンテナスイッチング回路には端子間容量の小さいピンダイオードを使いロスを少なくすると共に、長時間の連続送信でも安心して使用できるサーマルプロテクター回路を内蔵する等、最新技術を使っています。

●レピーター運用もできるマイコン搭載

C7900 Gにはシンプルでかつ実用性の高いマイコンが内蔵されています。

レピーター運用のための周波数シフト機能やシフト幅を任意に設定できるオフセット専用メモリーをはじめとし、M4とM5のメモリーを利用した、プログラムスキャン等、シンプルなフィーリングの中にも、それなりにマイコンを使った操作を楽しむことのできるソフトが組込まれています。

★5チャンネルメモリー

5つの周波数をメモリーすることができ、又、任意のメモリーを空にすることもできます。メモリースキャンも楽しめます。

★オフセット専用メモリー

5つのメモリーの他にオフセット専用のメモリーがあります。シフト機能（R1-S-R2スイッチ）と組合せ、レピーター運用等、送受信別々のスプリット操作ができます。

★色々楽しめるオールスキャン

C7900 Gのスキャンは次の3つの機能をもっています。

- ①現在表示中のMHz内をスキャンします。
（1MHz内スキャン）
- ②希望する周波数の間をスキャンします。
（プログラムスキャン）
- ③10MHzの全周波数をスキャンします。
（全周波数スキャン）

★1MHzずつクイックに周波数をアップできるMHzキー内蔵

★便利なCALL

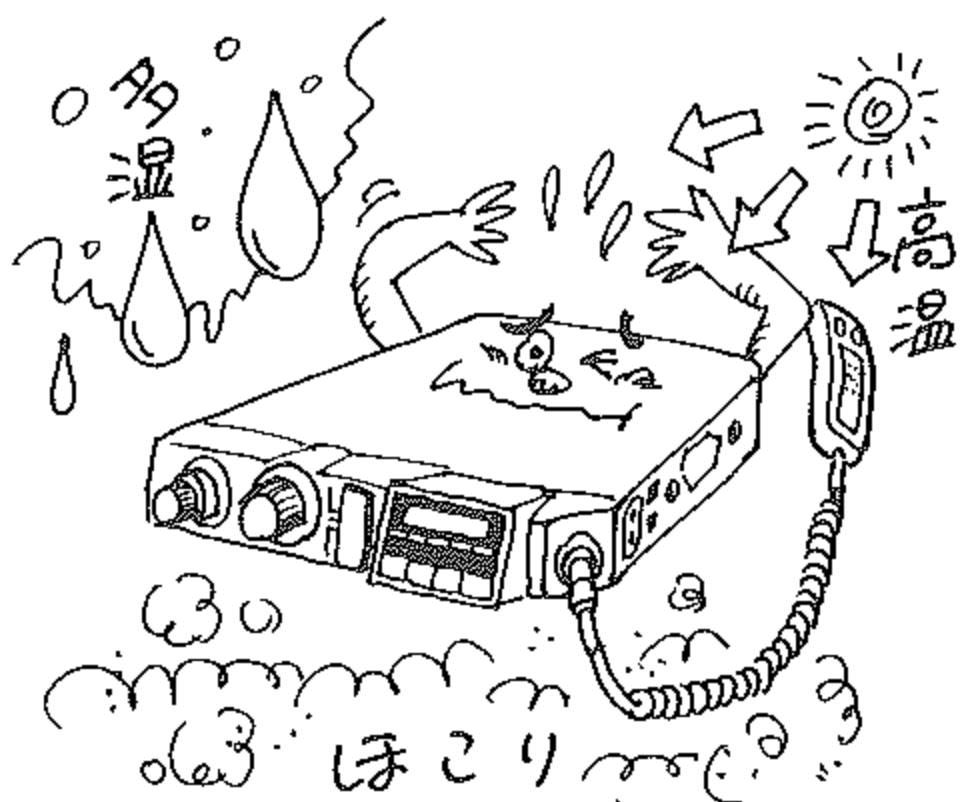
433.00MHz と 433.50MHz が優先的に呼びだされます。

お使いになる前に

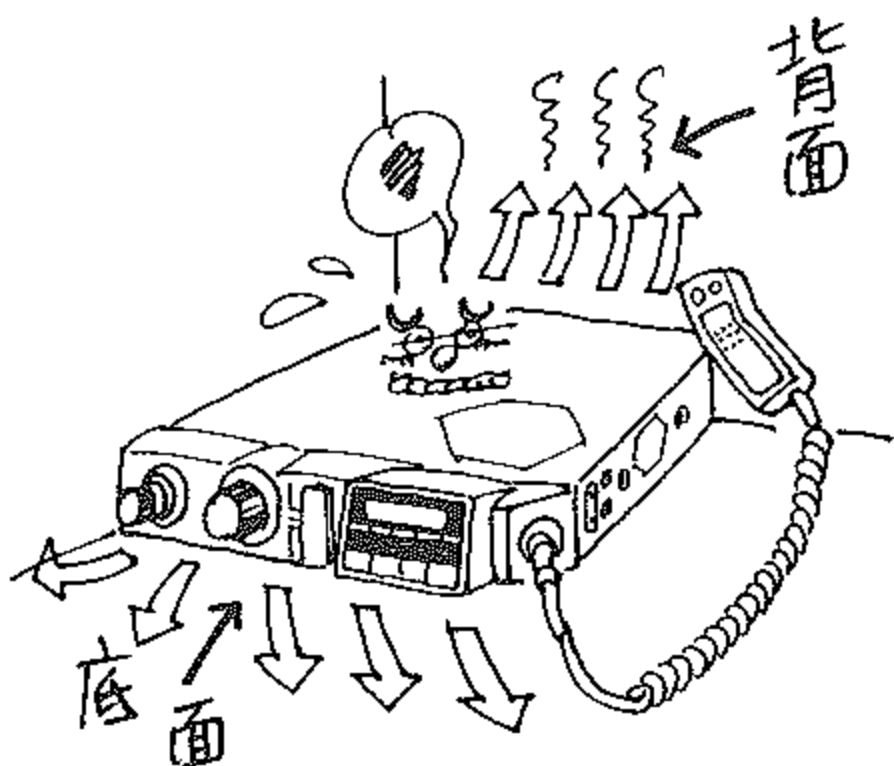
設置場所

本機の設置場所として次の点に留意してください。

①高温、多湿、ほこりの多い場所、特に日光が直接当たる場所は避け、風通しのよい乾燥した場所に設置してください。

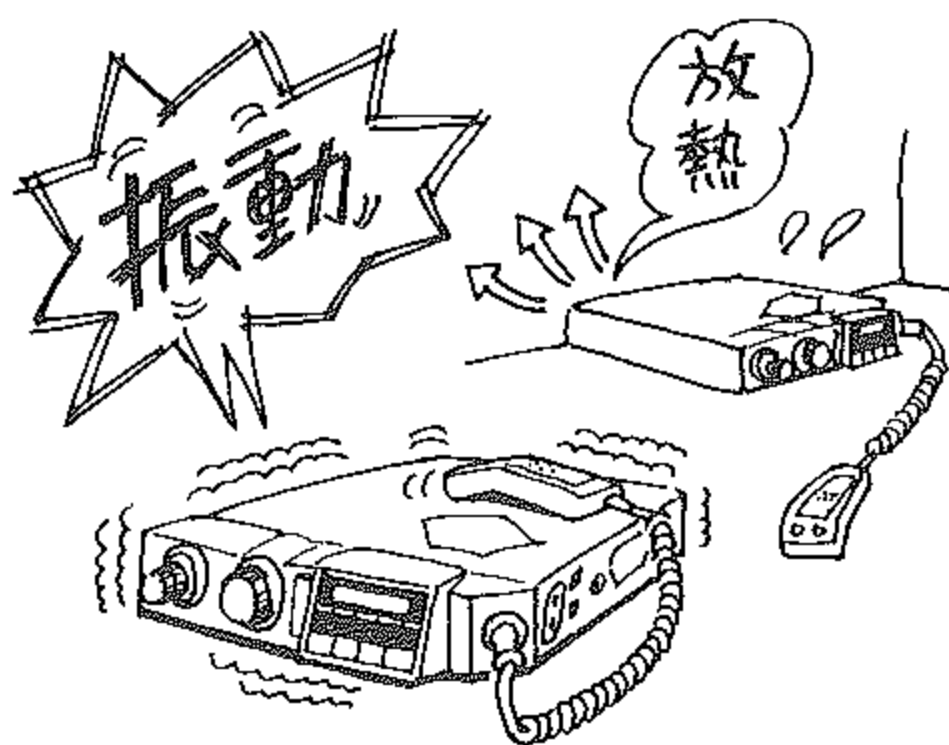


②ヒートシンクの冷却効果を妨げないよう、背面及び底面には十分スペースをとってください。



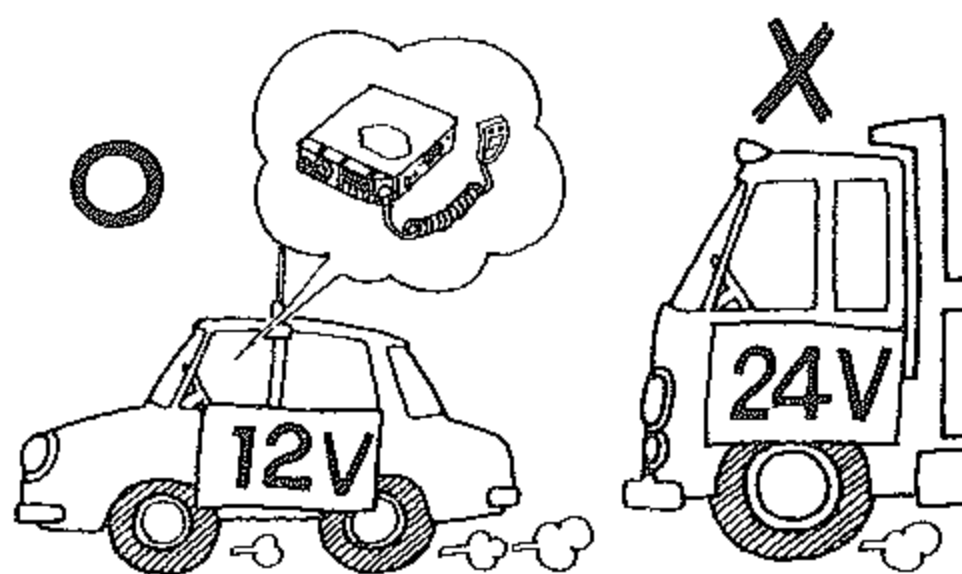
③車に取付ける際には、本機の背面が直接シートにふれないようにするなど放熱には十分配慮してください。

また、なるべく振動を直接受けない場所や状態での運用を心がけてください。



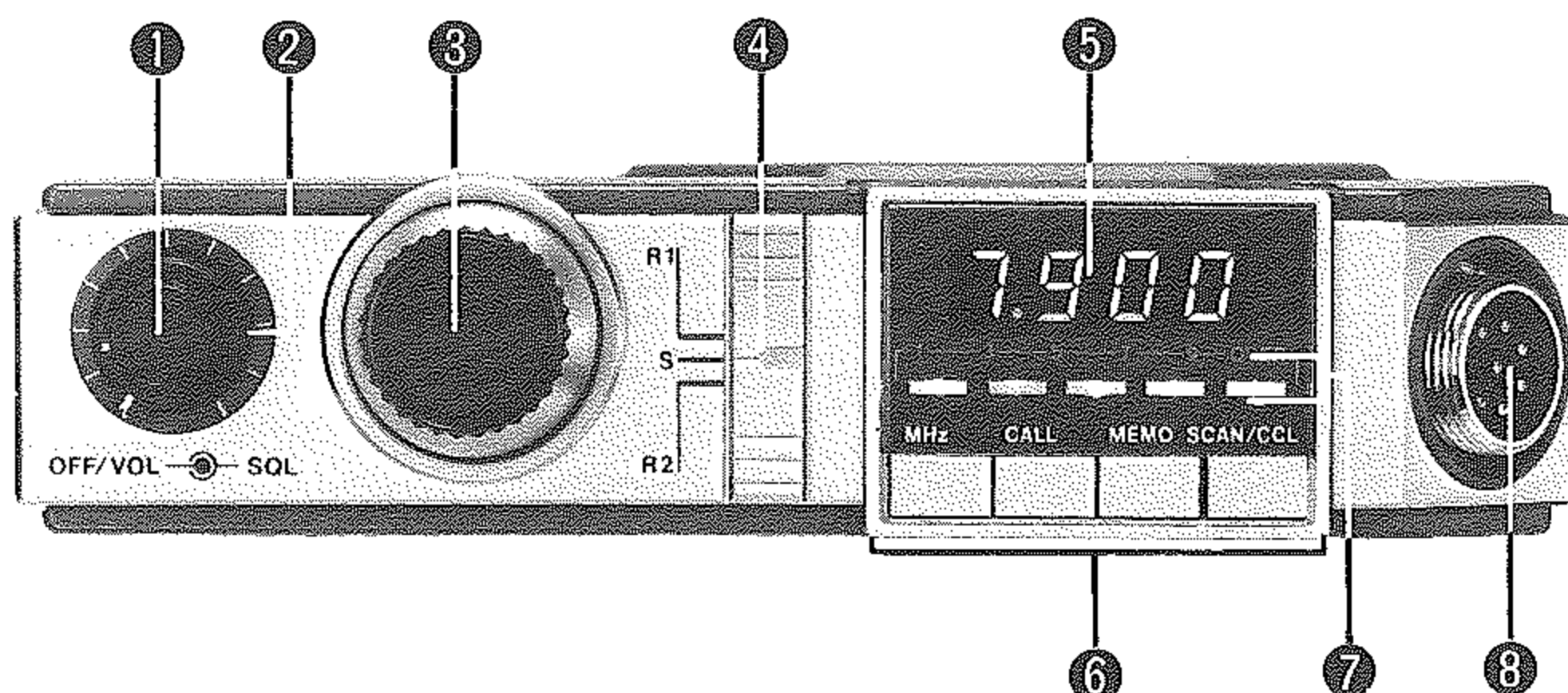
電源について

①本機はDC12V仕様車用です。大型車など24Vバッテリーには使用できませんのでご注意ください。



②AC100Vから使用する場合は、別売のパワーサプライ CPS 03 に接続してお使いください。

各部の名称と動作説明



① OFF/VOL (電源スイッチ/音量調節ツマミ)

ツマミを時計方向(↻)に回すと、カチッと音がし、電源が ON になります。

さらに回すにしたがって音量が大きくなります。ツマミを反時計方向(↺)へ回すと音量が小さくなり、カチッと音がするまで回し切ると電源は OFF になります。

② SQL (スケルチ・ツマミ)

FM 特有のザーという雑音を消すツマミです。入力信号がないときに反時計方向(↺)に回し切っておくとザーという雑音が聞えますので、時計方向(↻)にゆっくり回して雑音が聞えない位置に合せてご使用ください。

入力信号が加わってきたときだけスピーカより音声が入ります。

この SQL ツマミを右に回しすぎますと、弱い入力信号で音声は聞えなくなることがありますので右に回しすぎないように注意してください。

スキャン動作を行うときには、ザーという雑音が聞えない位置にしておいてください。

③ メインダイヤル

送信および受信周波数を変化させるダイヤルです。このダイヤルを時計方向(↻)に回すと周波数は高くなり、反時計方向(↺)に回すと周波数は低くなります。

1ステップで変化する周波数は 20KHz です。

④ RPT (レピータースイッチ)

通常運用とたすきがけ運用を切り替えるスイッチです。

通常運用のときは“S”の位置でご使用ください、たすきがけ運用のときは、R₁ 又は R₂ の位置でご使用下さい。

R₁ の位置のときは、受信周波数がシフト巾だけ送信周波数より高くなります。

R₂ の位置のときは、送信周波数がシフト巾だけ受信周波数より高くなります。

(注意)

シフト巾とは、オフセット専用メモリー(M6)にメモリーされた周波数です。

本機はトーンエンコーダー(88.5Hz)が内蔵されていますのでレピーター運用に対応できます。レピーター運用については、22ページを参照してください。

⑤ 周波数表示LED

1. 周波数表示(数字4桁)、メモリー(ドットの点滅、点灯) スキャン(ドットの点滅) の各動作を表示します。

433.000MHz を受信しているときは、**3.000** と下4桁を表示します。

CALL ボタンを押すと4桁目に“.”が表示されCALL 中であることを示します。

2. スキャンモード中は MHz 台表示右側のドットが点滅します。

3.000
↑ 点滅

3. MEMO キー操作中は10KHz 台表示右側のドットが点滅又は点灯します。

3.00.0
↑ 点滅又は点灯

4. メモリースキャン動作中はMHz台表示右側のドットが点滅し、10kHz 台右側のドットが点灯します。

3.00.0
↑ 点滅 ↑ 点灯

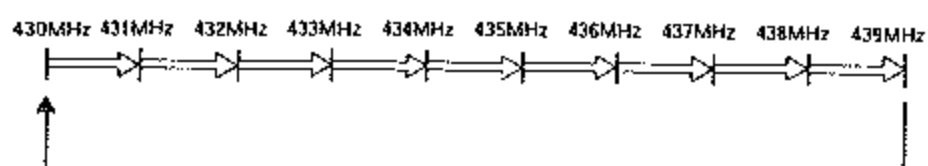
⑥ キーボード

4つのキーは、MHz、CALL、MEMO、SCAN/CCL の各動作を指令します。

① MHz

430MHz から 439MHz までの間を 1MHz ずつアップさせるキーです。

1回押すと 1MHz アップし、0.5 秒以上押し続けると連続的にアップします。



② CALL(コール)

433.000MHz と 433.500MHz を優先して呼び出すキーです。

1度押すと 433.000MHz、もう1度押すと 433.500MHz が呼び出せます。さらにもう1度押すと元の 433.000MHz に戻ります。優先的に 2つの周波数を呼び出すことができるので大変便利です。

③ MEMO(メモ)

メモリーチャンネルの呼び出し(RCL)と、希望周波数をメモリーさせる(ENTER)両方の機能を持ったキーです。

記憶回路は、M₁～M₅までの5チャンネルとオフセット専用メモリー1チャンネルの計6チャンネルの記憶能力があります。

10KHz 台右側のドットが点灯しているときは、キー操作で次のメモリーチャンネルを呼びだします。

点滅しているときは、キー操作で現在表示している周波数をメモリーします。

このキーを使用中は、ドットが点滅(呼び出し)、点灯(書き込み完了)します。

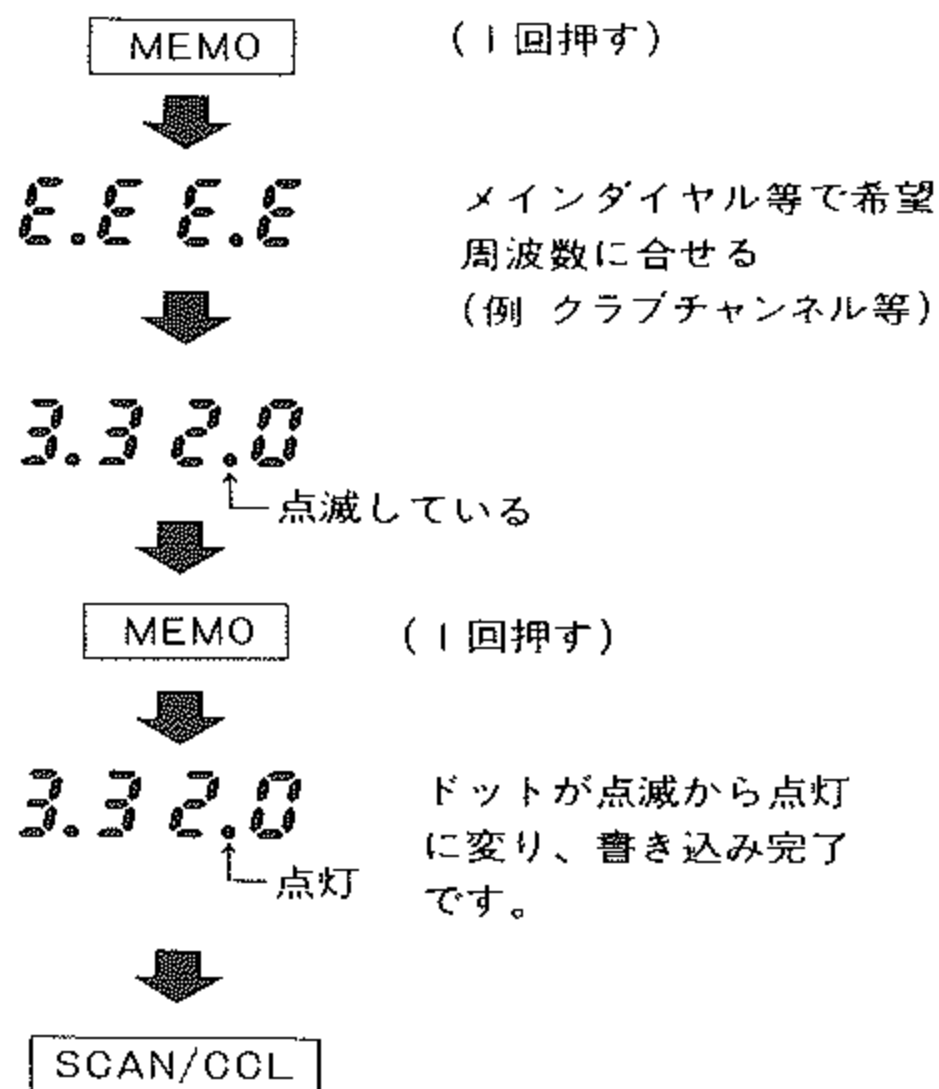
メモリー完了後は必ず SCAN/CCL キーを押してください。

- 周波数を記憶させる方法は次の手順で行ってください。

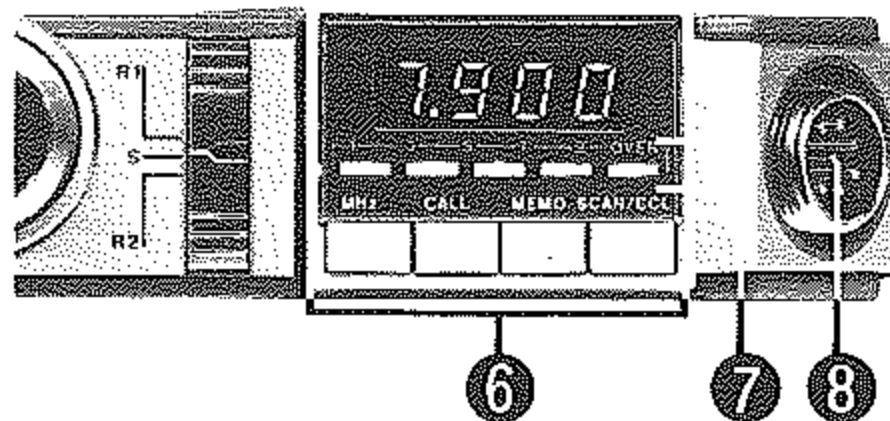
M1に記憶

OFF / VOL ツマミを時計方向に回して電源を ON にします。(3.000 が表示されます。)

例 433.320MHz を記憶する場合



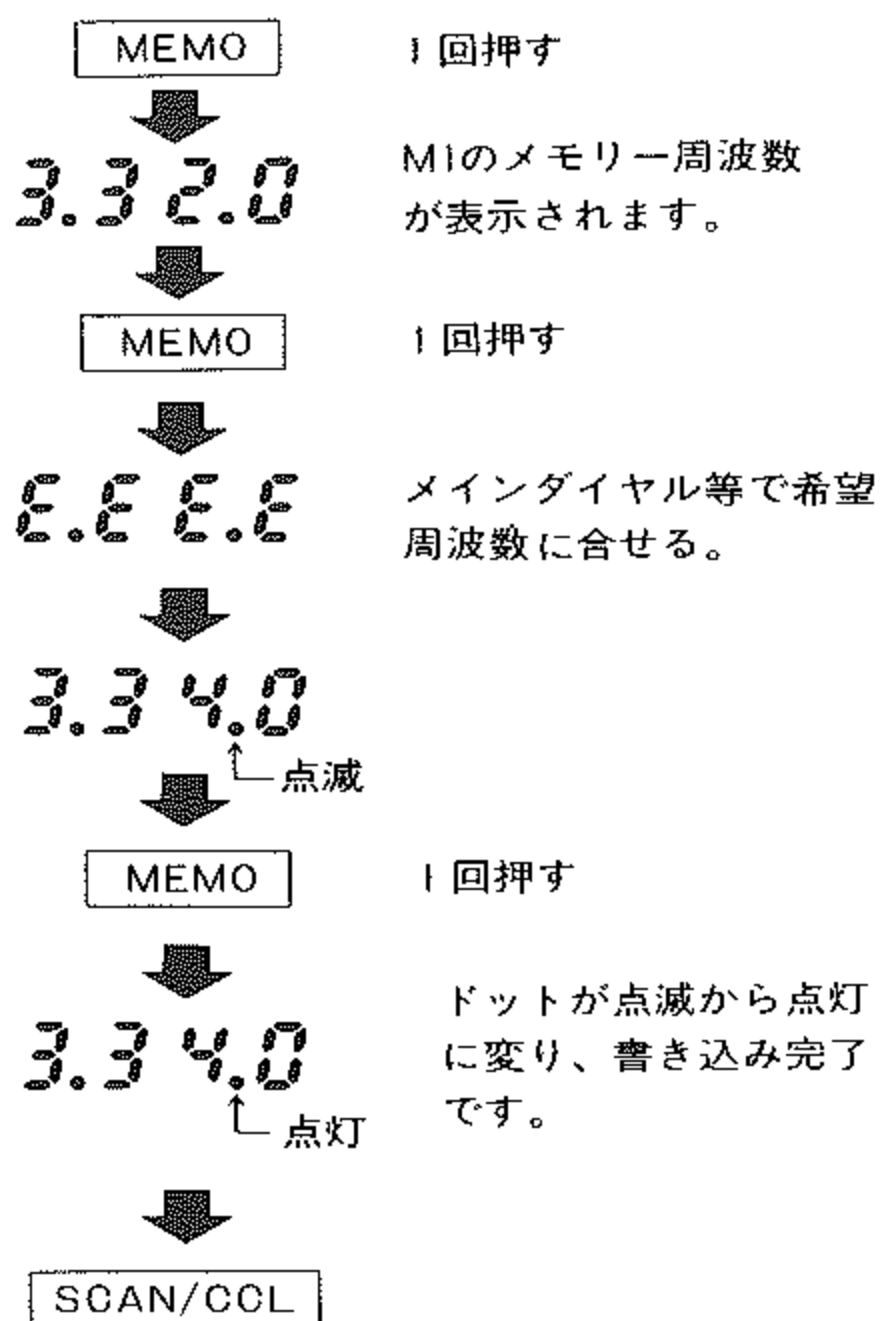
メモリー完了後は必ずSCAN/CCL キーを押してください。



M2に記憶

続いてM2にメモリーするときは、2回続けてこのキーを押してください。M2が呼び出されます。

例 433.340MHz を記憶する場合



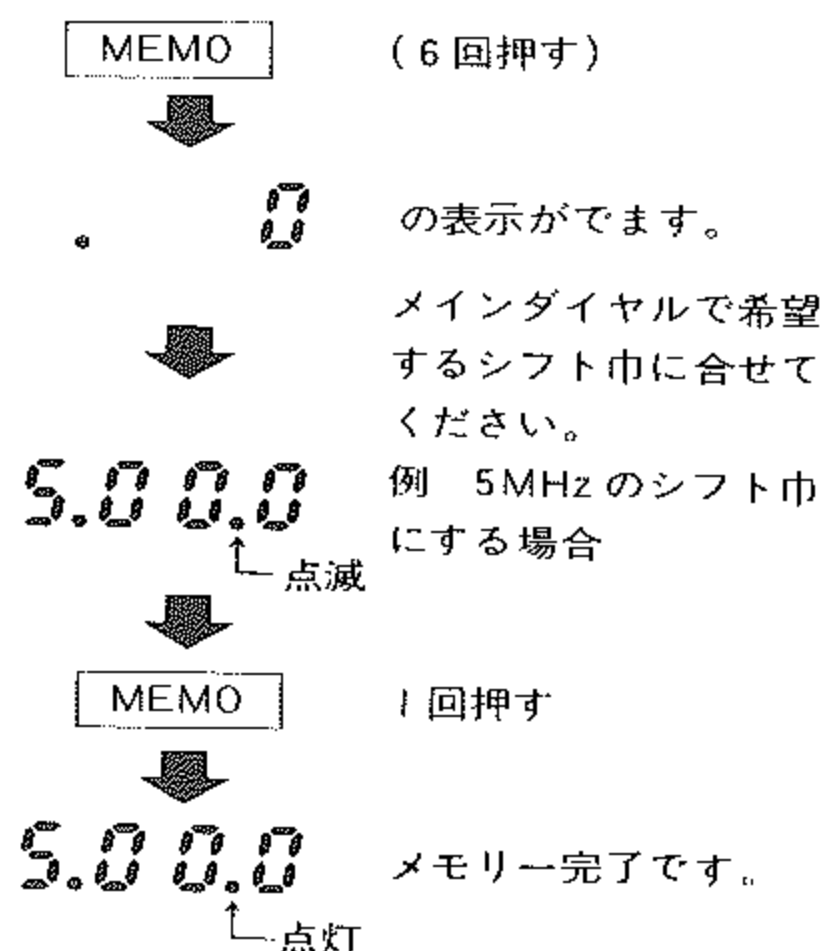
メモリー完了後は必ずSCAN/CCL キーを押してください。

M3～M5に記憶

同様にして M3～M5 まで順次行ってください。

- オフセット専用メモリーへのメモリー方法は次の手順で行ってください。

RPT スイッチはどこの位置でもかまいません。MEMO キーを6回押してオフセット専用メモリーを呼び出してください。

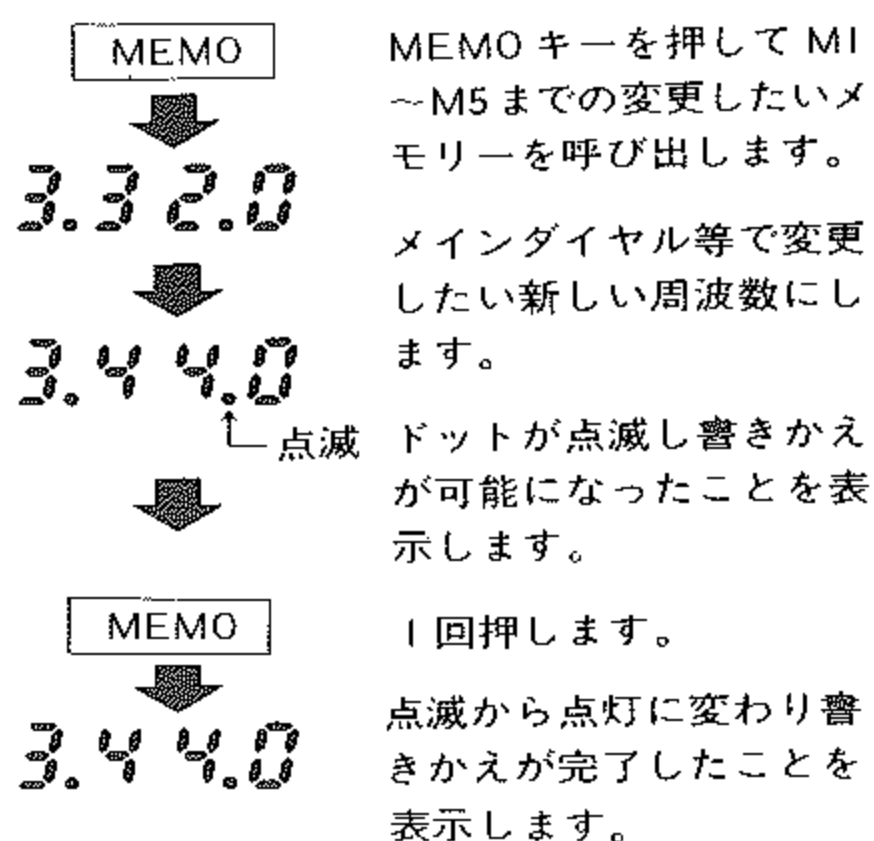


メモリー完了後は必ずSCAN/CCL キーを押してください。

- 書き込まれているメモリー周波数を変更するとき。

呼び出したメモリー周波数を、変更したい新しい周波数にメインダイヤル等を使用して変更し、もう1度 MEMO キーを押すと書きかえができます。

例 433.320MHz を 433.440MHz に変更する場合



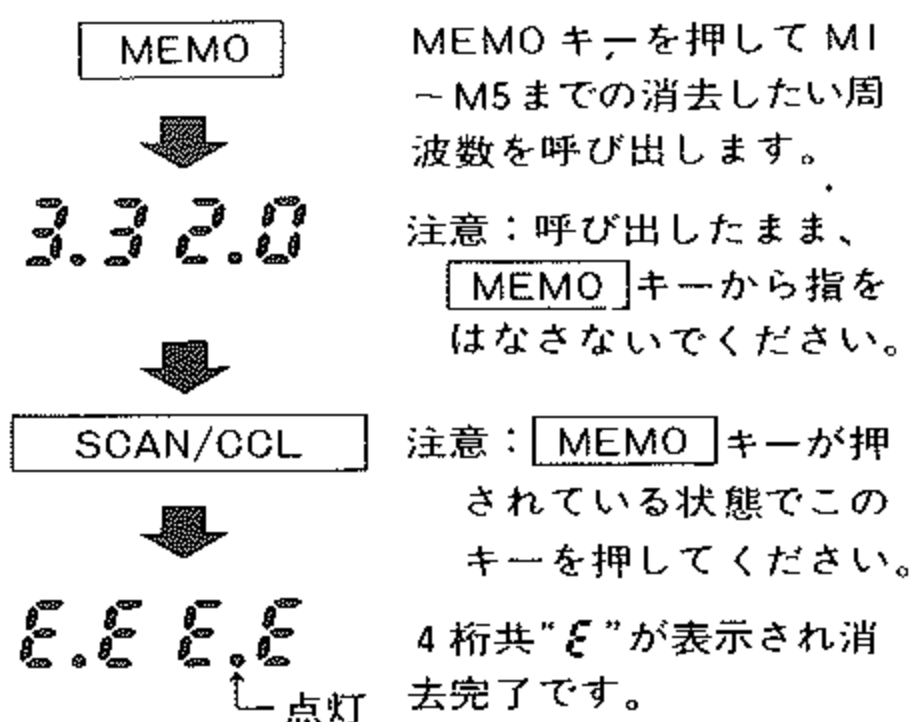
変更完了後は必ずSCAN/CCL キーを押してください。

オフセット専用メモリー周波数の変更も上記方法で行ってください。

●書き込まれているメモリー周波数を消去するとき

消去したいメモリー周波数を呼び出しMEMOキーとSCAN/CCLキーを同時に押してください。

例 メモリー周波数を消去する場合



消去完了後は必ずSCAN/CCLキーを押してください。

●オフセット専用メモリーの消去のしかた

注意：オフセット専用メモリー周波数は上記方法では、消去できませんので下記の方法で行ってください。

バックアップスイッチをOFFにし、電源スイッチをOFFにしてください。
但し他のメモリー周波数も同時に全て消去されます。

④SCAN/CCL(スキャン/キャンセル)

このキーは、下記のような2つの機能を持っています。

- 1.各動作をキャンセルする。
- 2.スキャン動作を開始又は停止する。

スキャン動作中に、信号が入感すると、スキャンは停止し、信号が無くなると再スタートします。(BUSY'スキャン方式)

スキャン停止中に再度スキャン動作をさせたい場合は、マイクローホンのUPスイッチを押してください。20KHzステップで再びスキャンをはじめます。

スキャン動作中に、SCAN/CCLキーを押しますとスキャン動作が解除されます。

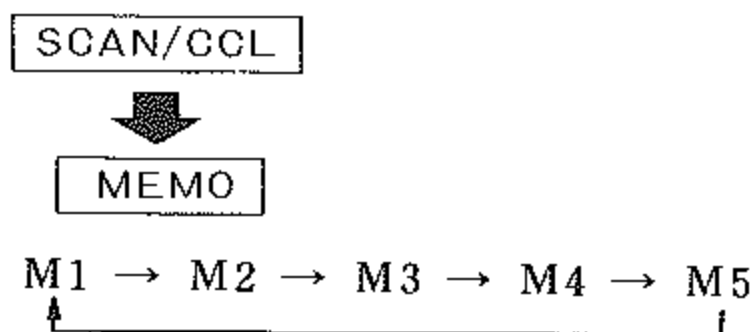
スキャン動作は、全帯域、1MHz、プログラムスキャンの3種類があります。

スキャン中はMHz台表示右側のドットが点滅します。

●全帯域スキャン

4番目のメモリーに周波数がメモリーされていて、かつ5番目のメモリーに周波数がメモリーされていないときに全帯域スキャンを行います。

- メモリー周波数をスキャンするとき
メモリースキャンのときは、SCAN/CCL
キーでスキャン状態とし、次に
MEMO キーを押してください。



の順でメモリー内をスキャンします。又、
メモリー内容が空の所はスキップしてス
キャンします。

●1MHz スキャン

4 番目のメモリーに周波数がメモリーされ
ていないときのみ表示されている周波数の
1MHz 内をスキャンします。

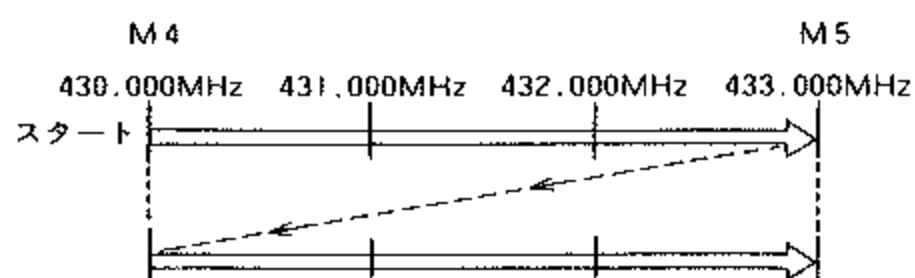


をくり返しスキャンします。

●プログラムスキャン

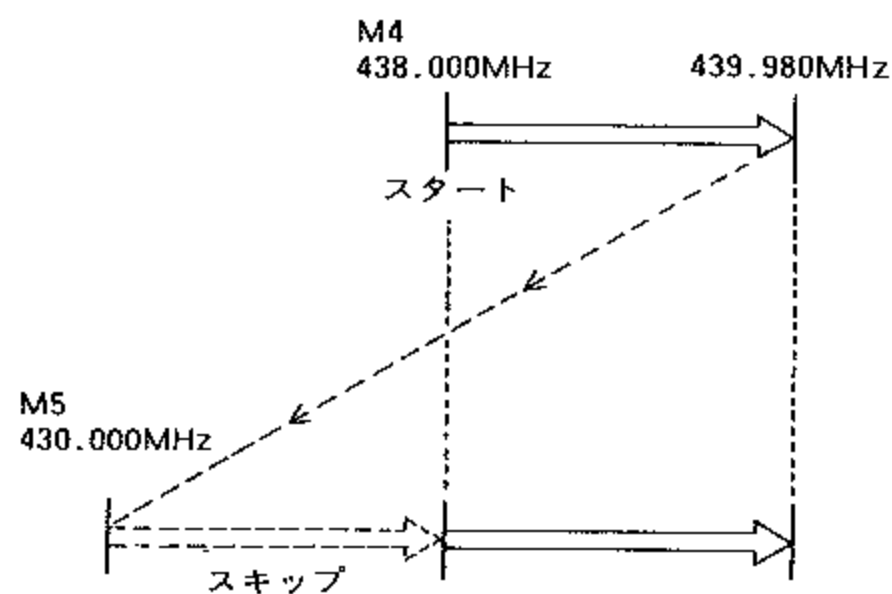
M4、M5に周波数がメモリーされていると
きに、4番目のメモリー周波数から周波数が
高くなる方向に5番目のメモリー周波数ま
でスキャンします。

M4に 430.000MHz、M5に 433.000MHz が
メモリーされているときは



注意：このプログラムスキャンは、必ずM4
のメモリー周波数よりスキャンがスター
トしますので、M5のメモリー周波数が
M4のメモリー周波数より低いときは図
のようにスキャンします。

M4に 438.000MHz、M5に 430.000MHz が
メモリーされているとき。



⑦ メーター

緑色3ケと赤色2ケ計5ケのLEDで入力信号強度“S”（BUSY 表示含む）と送信出力“RF”を表示します。

Sメーター

“S”メーターとしての動作は入力信号の強弱によりLEDが左側より右側に向って点灯していきます。但し、一番左側の緑のLEDは、BUSY 表示としての動作も兼ねています。

SQL ボリュームを反時計方向に回し切っておくとノイズだけでこのLEDが点灯します。ノイズが聞こえなくなる位置（スレッシュポイント）にSQL ボリュームを調整しておくと、このLEDは消えますが、微弱電波等（ノイズ状態のものを含む）を受信し、SQL が開くと、このLEDは点灯します。又タイトスケルチ（SQL ボリュームを時計方向に回し切った状態）にしておくとSQL が開かない状態でも微弱電波によりSメーターとしてLEDが点灯します。

RFメーター

マイクロホンのPTTスイッチを押し、本機が送信状態になると全てのLEDが点灯します。

なお1W送信のときは、2～4ケのLEDが点灯します。

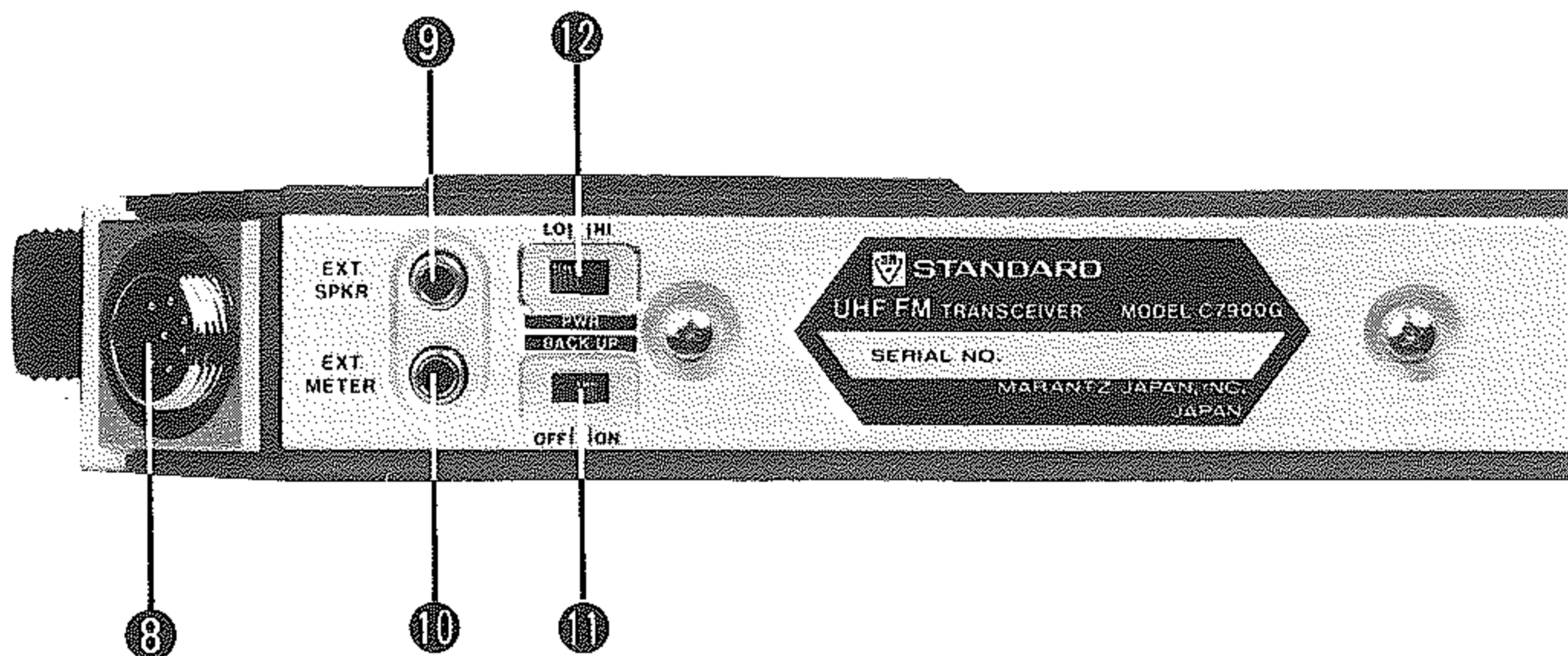
注：PTTスイッチを押してもLEDが点灯しない場合は、マイクロホン又は本機の故障と考えられますので使用をおやめください。

⑧ MIC（マイクロホン接続端子）

附属のUP、DOWNスイッチ付ハンドマイクロホン CMP726 を接続する端子です。

（別売のマイク／スピーカ MP736 をご使用しますと、外部ノイズの多い所での運用に大変有効です。）

注意：当社指定以外のマイクロホンをご使用になるときは、インピーダンス600Ωのものをご使用ください。

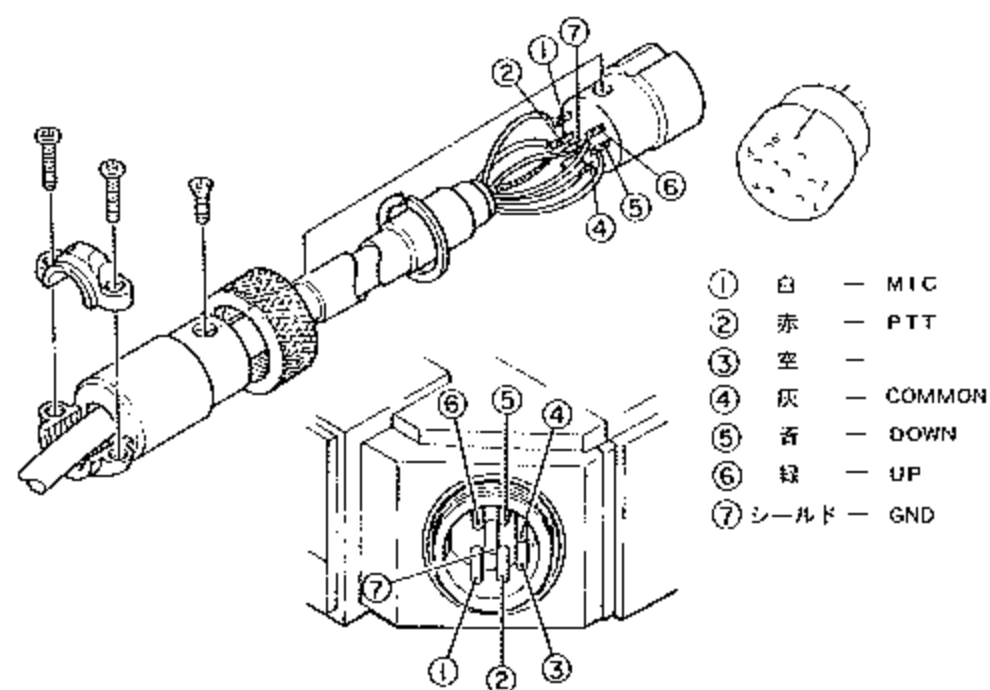


⑨ EXT SPKR(外部スピーカ接続用端子)

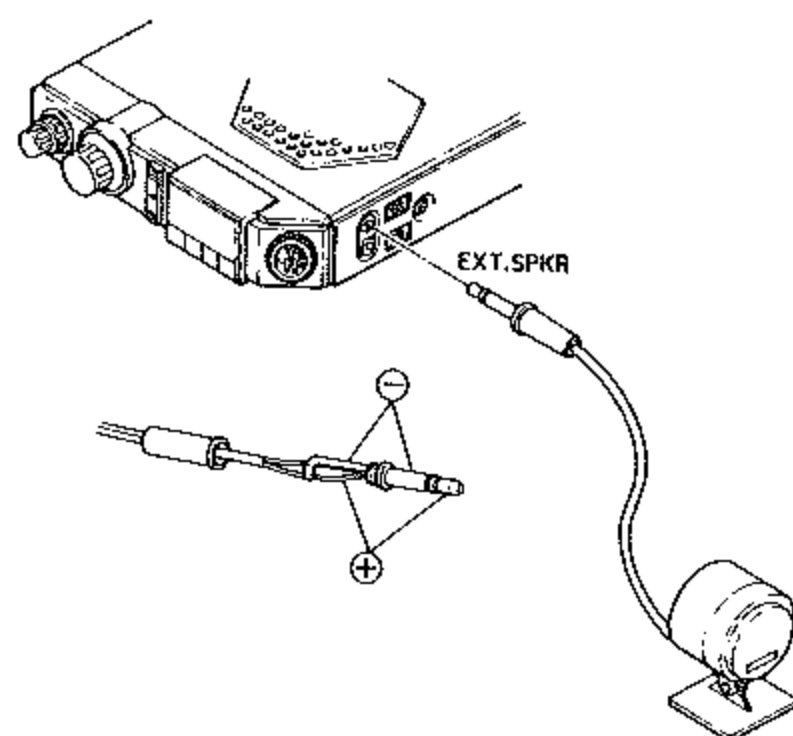
外部スピーカを接続する端子です。

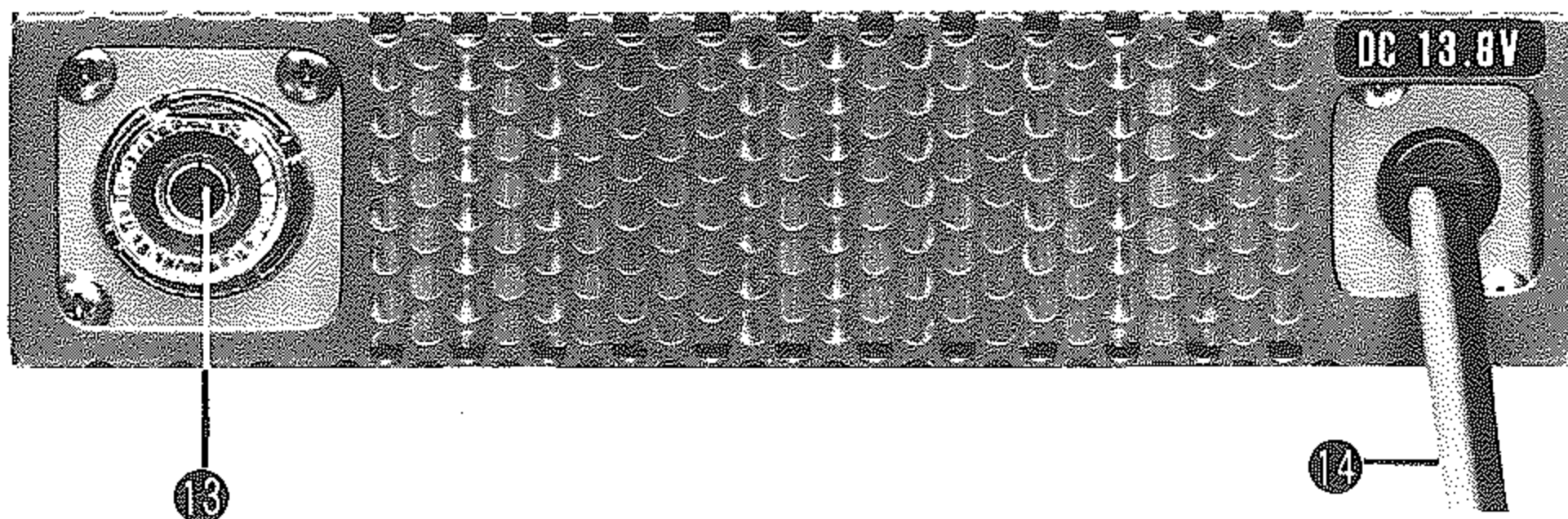
別売の外部スピーカ C207M をご利用ください。この端子に外部スピーカを接続すると、本機に内蔵されているスピーカからの音はきこえなくなり、外部スピーカからのみ音が聞えます。

C207M 以外の外部スピーカを使用される場合は、3.5φのプラグを使用して下図のように配線してください。



本体側の3番ピンには、オーディオ信号が取り出せるよう配線されています。





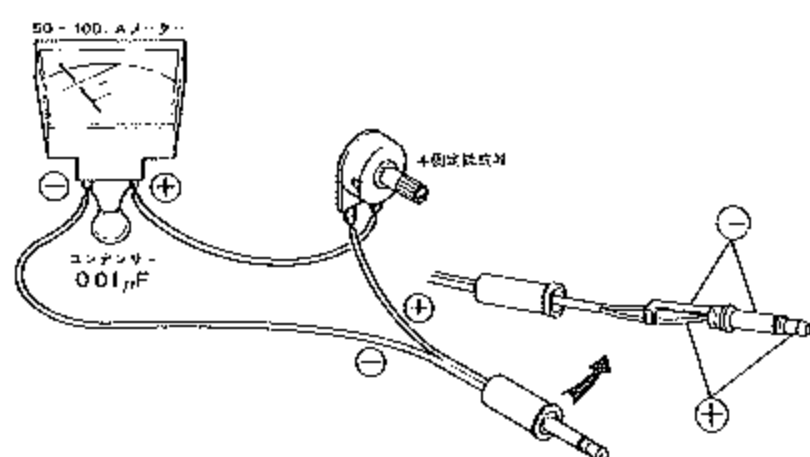
⑩ EXT METER(外部メーター接続端子)

アナログ用外部メーター接続端子です。

この端子に約 $50 \sim 100 \mu A$ の直流電流計を接続し、Sメーターとしてご使用ください。

またメーターの振れを少なくしたい場合はメーター出力の+側に $47K \sim 100K \Omega$ 程度の半固定抵抗器を直列に入れ調整されることをおすすめします。

回路例

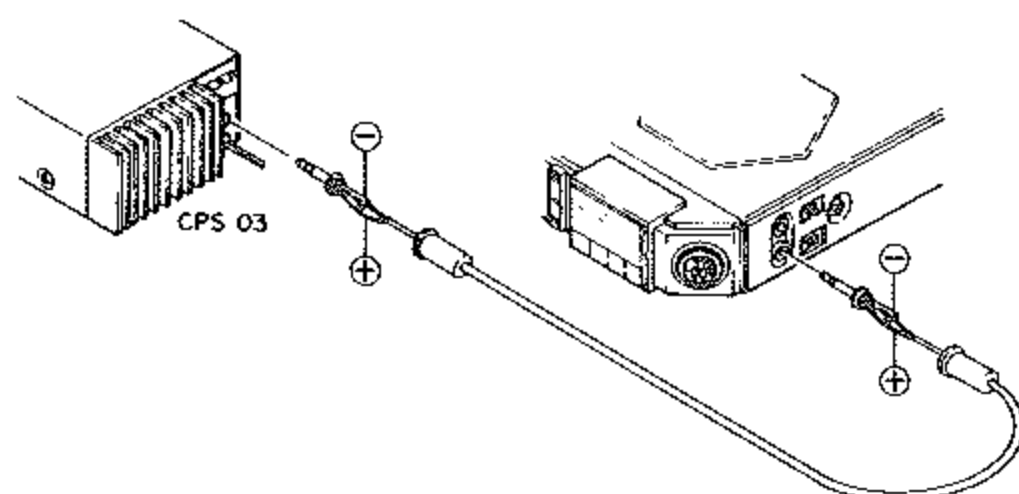


- 半固定抵抗器を回してメーターの振れを調整してください。

注上記の回路例で直列抵抗が小さい場合は本体側のメーターの振れに影響をあたえることがあります。

別売の定電圧電源 CPS03 には、外部メーター入力端子がありますので CPS03 と合せてご利用ください。

本機と CPS03 とは図のようなコードで接続します。



市販されている3.5φプラグ2ヶとシールド線又は、普通のコード（細いものでよい）を準備してください。

⑪ BACK UP (バックアップスイッチ)

電源スイッチの ON・OFF に関係なく、常にメモリー回路に電圧を加えておき、メモリーされた周波数を保持するためのスイッチです。

OFF の位置では、メモリー周波数は保持されません。

注意：

本機を車載で使用されるときは、次の点に注意してください。

- 自動車を長時間使用されないときは必ずこのスイッチを OFF にしておいてください。

- 本機への電源配線は、なるべくバッテリーより直接行ってください。車種によって異なりますが、スターター始動時 OFF になるラインがありますので、このようなラインに配線しますとバックアップスイッチが、ON になっていてもバックアップされないことがあります。

⑫ HI-LOW パワー切替スイッチ

送信電力を1 Wと10Wに切り替えるスイッチです。

バンド内の有効利用からも近距離通信のときはLOW/パワーで運用してください。

⑬ ANT (アンテナ端子)

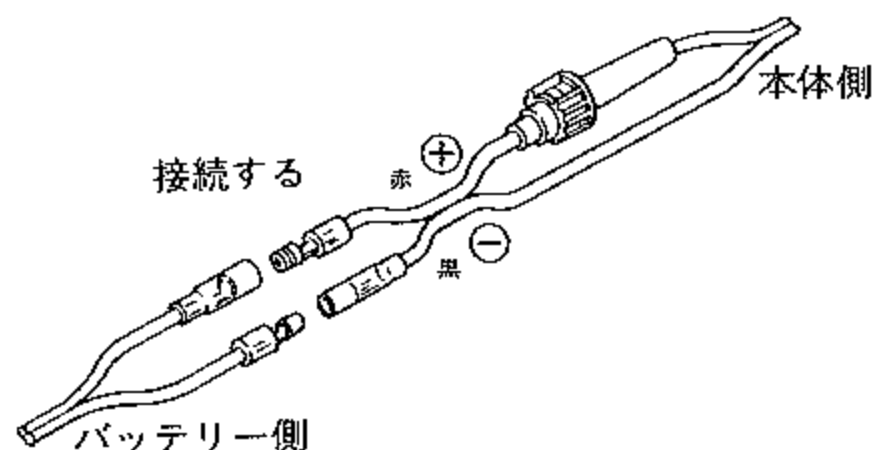
50 Ω インピーダンスのアンテナを接続するM型コネクタ端子です。

コネクタはしっかり締めつけてください。

⑭ 電源コード

直流13.8Vを加えるコードです。

付属の接続ケーブルを使用して本体とバッテリー等とを接続してください。



⑮ UPスイッチ

周波数を連続的にUPできるボタンです。

0.5秒以上押し続けると連続してUPします。

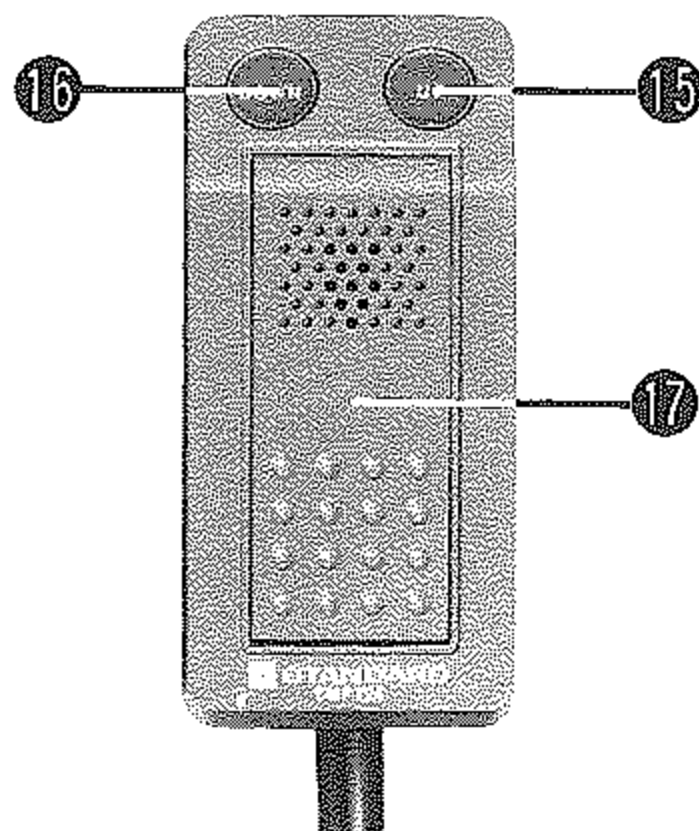
⑯ DOWNスイッチ

周波数を連続的にDOWNできるボタンです。

0.5秒以上押し続けると連続してDOWNします。

⑰ PTT

送信用のプレストークスイッチです。押すことにより送信状態になります。

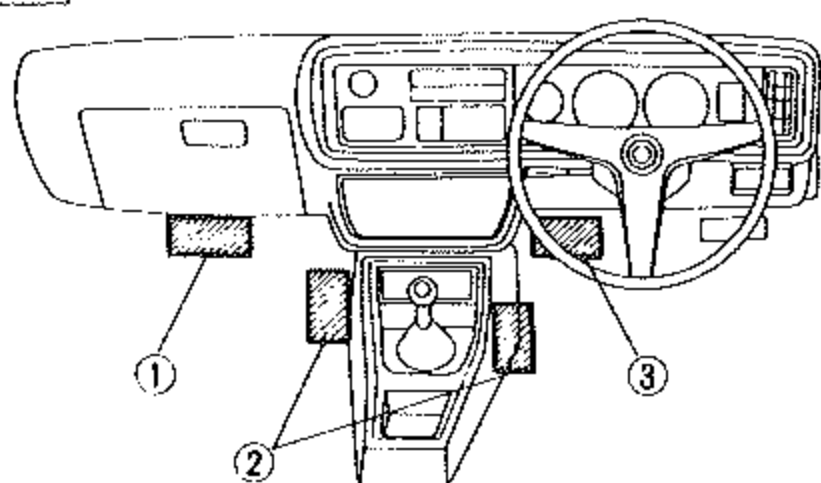


取付け方法

モバイル使用の場合

本機の取付場所は、ダッシュボードの下、コンソールボックスの横および計器類の下等があります。暖風およびクーラーの吹き出し口の近くには取付けないでください。又、運転にさしつかえないように充分考慮して取付けてください。

図1 モービル車内取付け位置



ブラケットの取付け方法

ブラケットを取付ける場合、ブラケットがしっかり固定される場所を選んでください。ブラケットは、必ず4本のビスでしっかり固定してください。

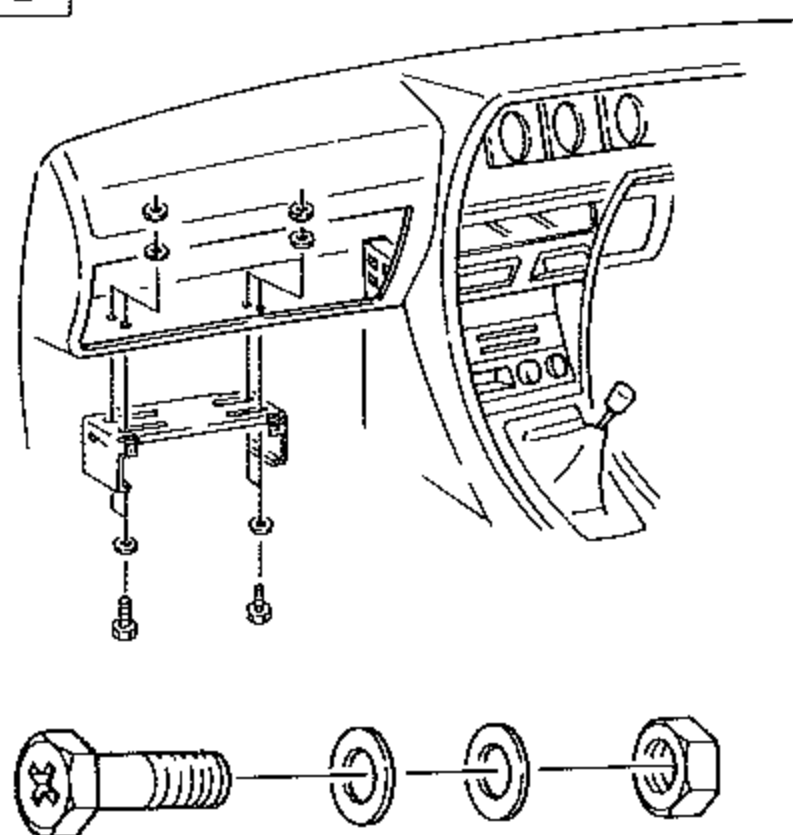
① 5 mmのビスを使用する場合は5.2～5.5mm、また5 mmのタッピングビスを使用する場合は4.0～4.3mmの穴をドリルであけてください。

② 5 mmのビスを使用する場合は、図2のようにワッシャーにビスを通し、ブラケット側(車内)から車体内装にあけた穴に通して、内装裏側よりワッシャー、次にナットを通して固定します。(ビス4本を固定します。) 5 mmのタッピングビスを使用する場合は穴にタッピングビスを直接ネジ込んでください。ネジ山が自動的に切り込まれて固定されます。

ビスを締めつけるときは、スパナかⒶドライバーをご使用ください。

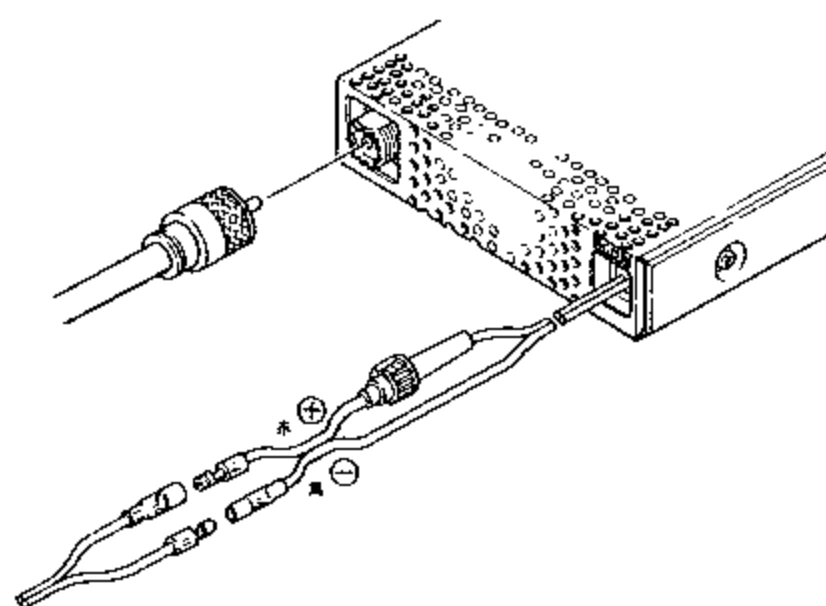
●ブラケット取り付け用穴加工型紙は20ページに記載されていますのでご利用ください。

図2



③本機の後面パネルに、アンテナケーブルおよび電源コードを接続します。(図3)

図3 後面パネル接続図



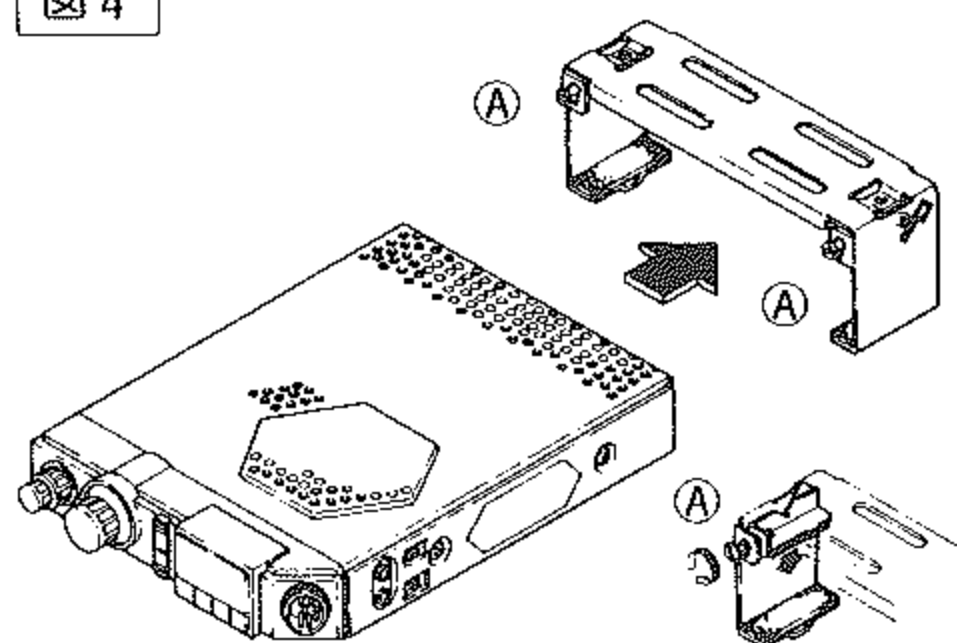
注：側面のBACK UPスイッチは、前もってセットしておいてください。

④モバイル運用時、ダッシュボード等にこの
ブラケットを取付け、本機を固定します。
本機を固定するには、図4の ④ 部のビスを
緩めて、本機が入るようにします。

本機をブラケットに入れ、④ 部のビスをド
ライバーを用いて締めつけてください。

注：ブラケットに本機を入れる前にDCコー
ド、同軸ケーブルは接続しておいてくだ
さい。

図 4



アンテナの取付け方法

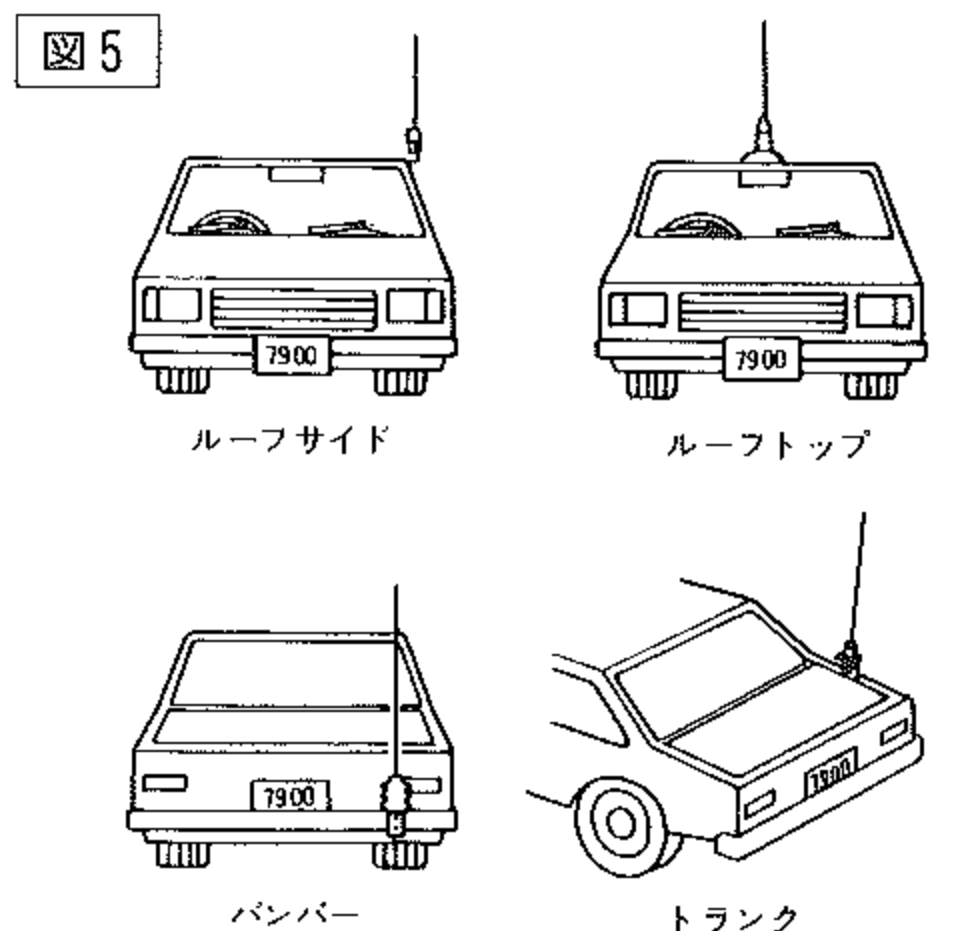
アンテナを自動車に取付けるときはアンテナ
ベースを使用しますので、車種および使用さ
れるアンテナに合ったアンテナベースをお買
い求めください。

アンテナベースを取付ける場所としては、図
5のような場所が一般的です。

注：アンテナベースを取付けるときは、アー
スが完全にとれるようにしてください。

本機の性能を十分に発揮していただくため
にも特性の優れたアンテナをご使用ください。
アンテナの SWR は1.5以下になるようにア
ンテナを調整し、使用してください。SWR
が悪いと正規の送信電力が出なくなります。

図 5



電源の配線

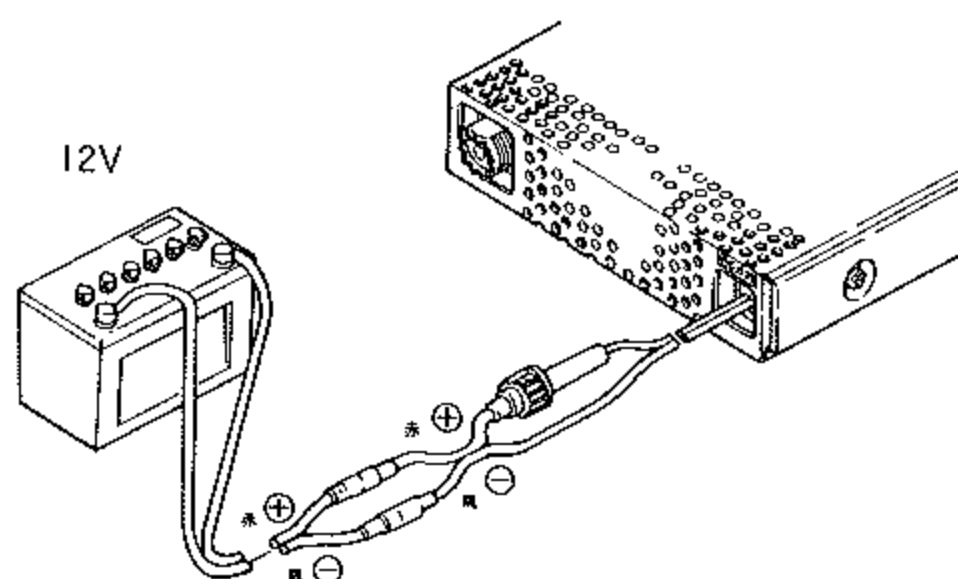
本機は13.8V入力になっておりますので、大型トラック等の24V仕様車にはご使用できませんのでご注意ください。

電源の供給方法としては、バッテリーに直接電源コードを接続する方法と、シガーライター端子から取る2つの方法がありますが、直接バッテリーに接続する方法をおすすめします。(図6)

電源コードをエンジンキーと連動する電源に接続しますと、BACK UPスイッチをONにしておいても、メモリー周波数は保持できません。

注：本機はマイナス接地方式です。

図6 バッテリーからの接続方法



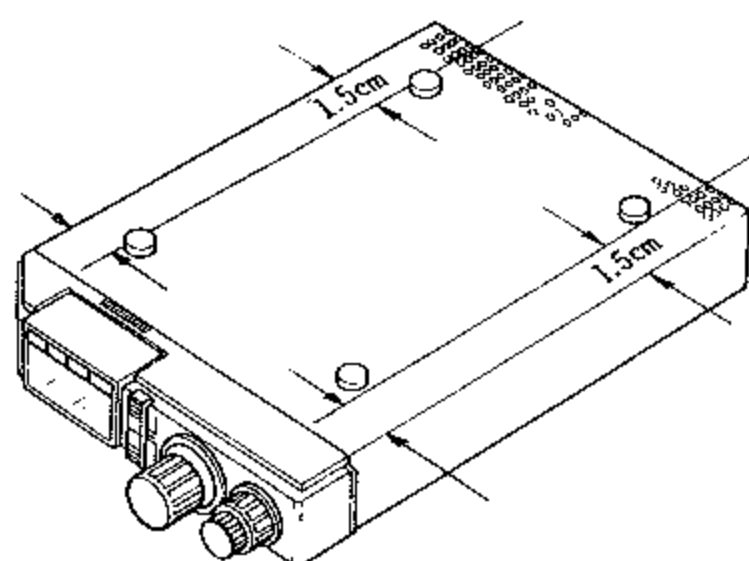
固定局の場合

- 本機は固定局用としてもご使用になれますので、安定化電源の上もしくは机の上に設置する際には、付属の脚4ヶを本機の底面に貼りつけてご使用ください。

取付方法は下図の通りです。

ゴム脚4ヶには各々両面接着紙が貼られていますので、脚取付箇所の油や汚れを落してから、ゴム脚の保護紙をはがし図の様な位置に強く押しつけます。

注：脚は図のように1.5cmより外側に貼付けますと、本機をモービル・ブラケットに入れることができなくなりますので、1.5cmの所又はそれより内側に貼りつけてください。



- 定電圧電源は別売のCPS03又は、D.C出力13.8V、出力電流4A程度のものでご使用ください。

CPS03には外部“S”メーター端子がありますので、本体のEXT.METER端子とCPS03のMETER INPUT端子に3.5φプラグ付のコードを接続すると、CPS03のメーターを“S”メーターとして使用することができます。

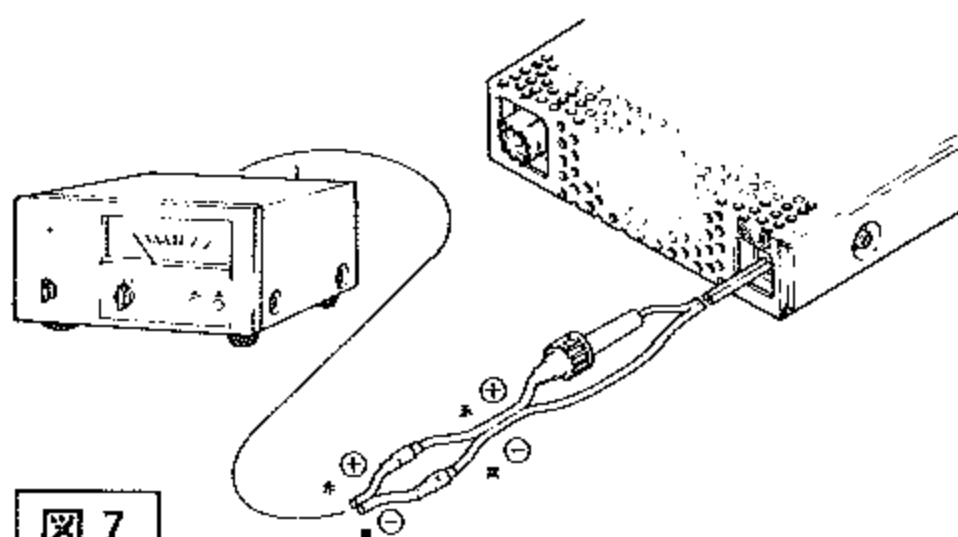
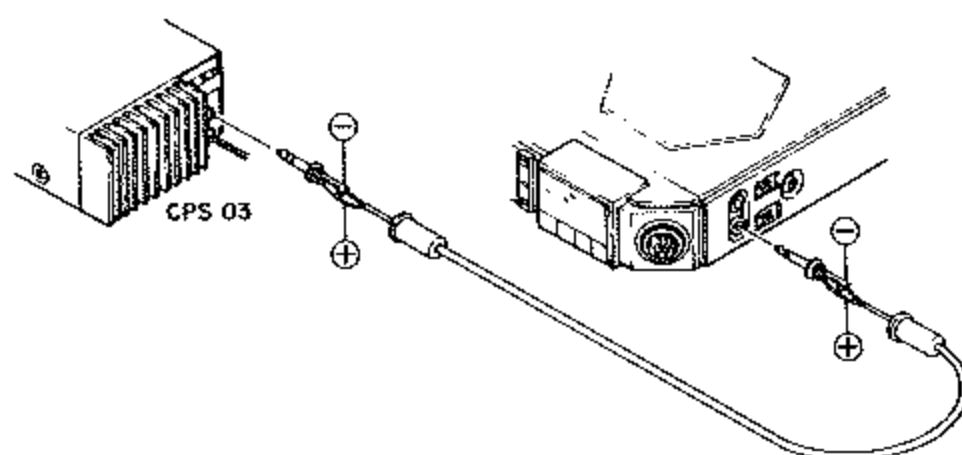


図7

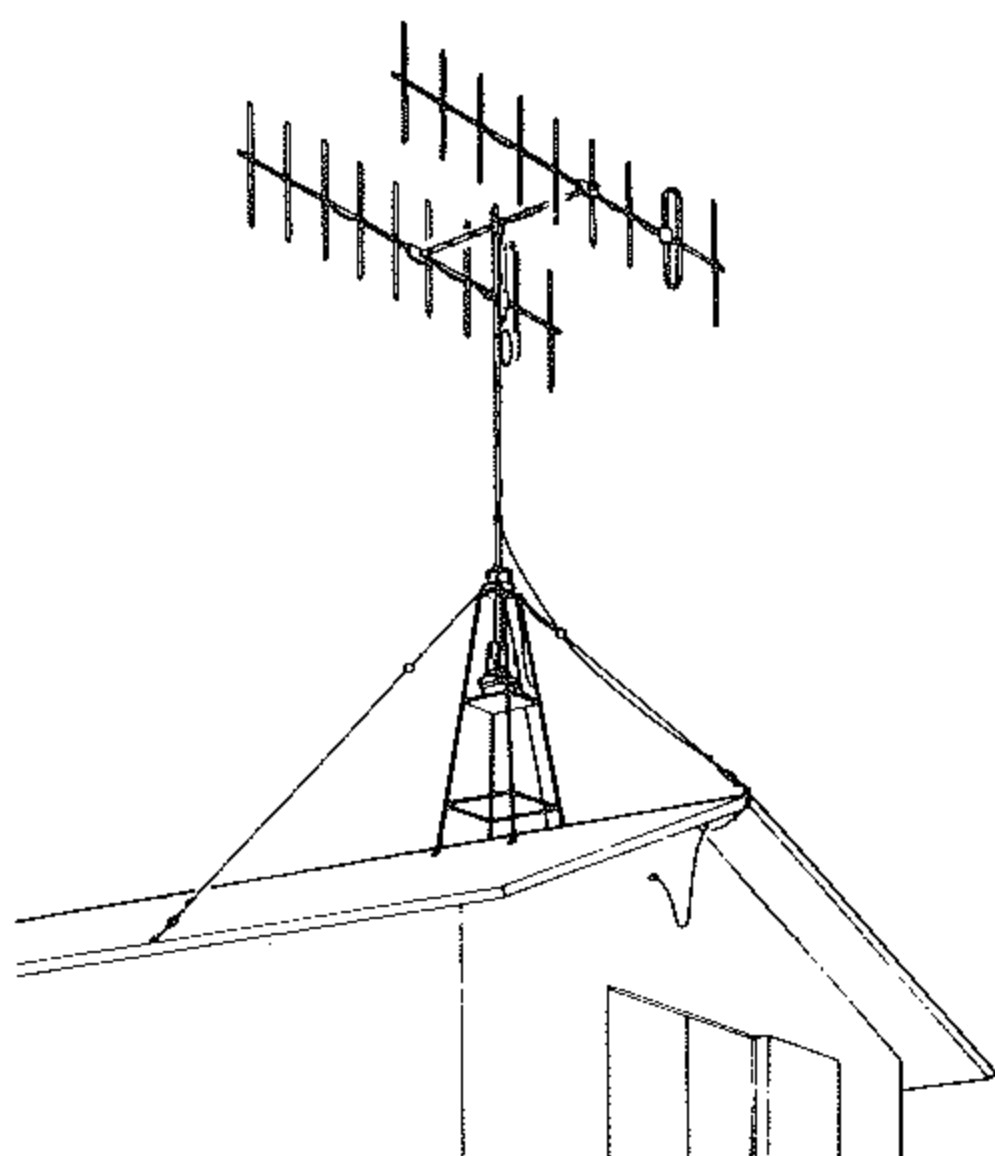
アンテナについて

アンテナの種類および設置方法によって、送信、受信の具合が大きく左右されますので、性能のしっかりしたアンテナを選び取付け後の調整も念入りにおこなってください。

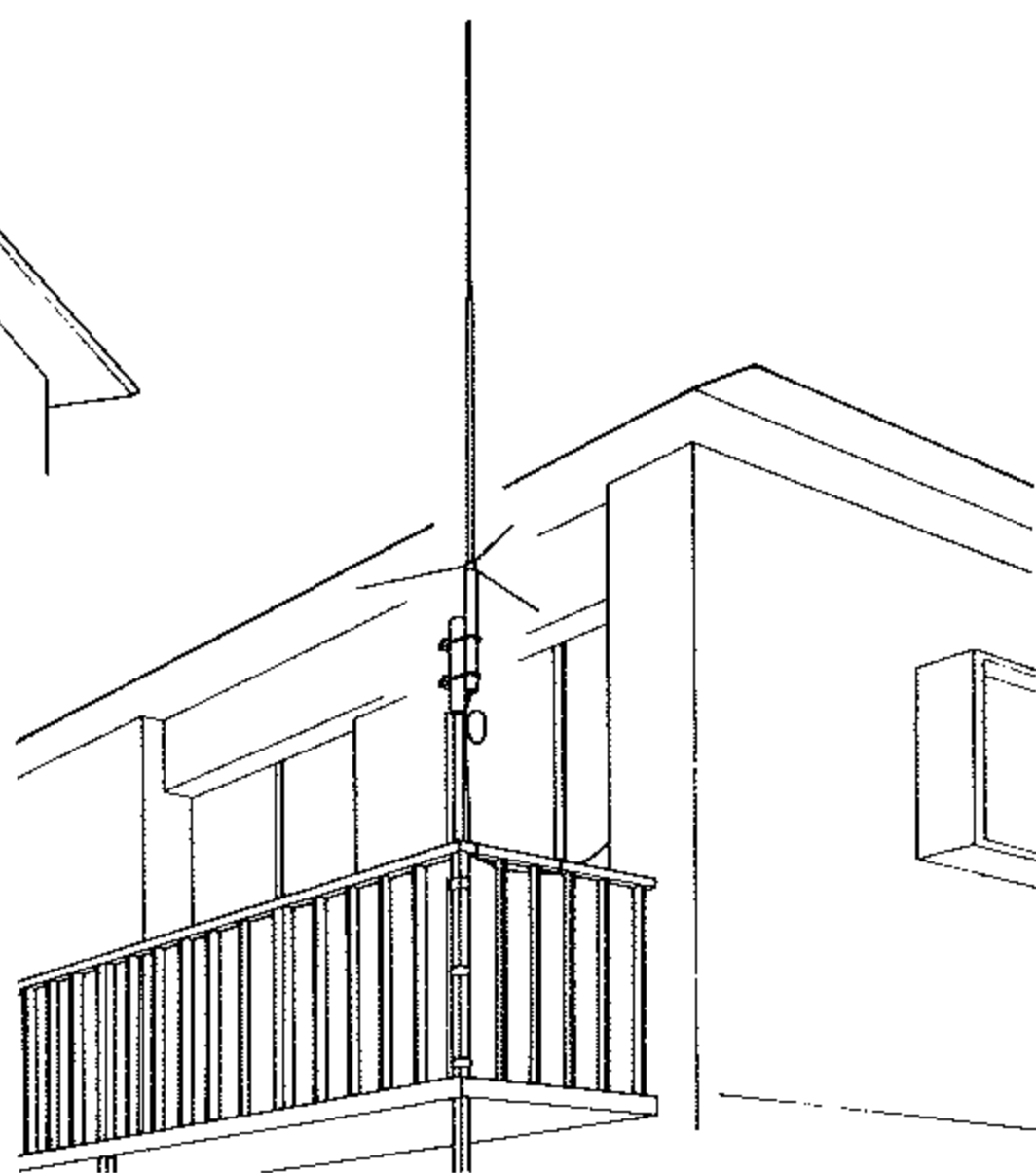
ローカル QSO 用にはグランドプレーンアンテナ(無指向性)が適していますし、遠距離との QSO には八木アンテナ(指向性がある)が適していますので目的および用途に合ったア

ンテナをお選びください。

アンテナから本体までの同軸ケーブルが長くなり過ぎますと、同軸ケーブルでの損失が大きくなりますので、同軸ケーブルはなるべく最短距離を通すようにしてください。長さが 10m までですと 8D2V、30m まででは 10D2V 以上の太い同軸ケーブルをご使用ください。



(八木アンテナ)
〈屋根に取り付けた時〉



GP(グランドプレーン)アンテナ

〈ベランダに取り付けた時〉

操作方法

運用に当って

●430MHz 帯使用区分

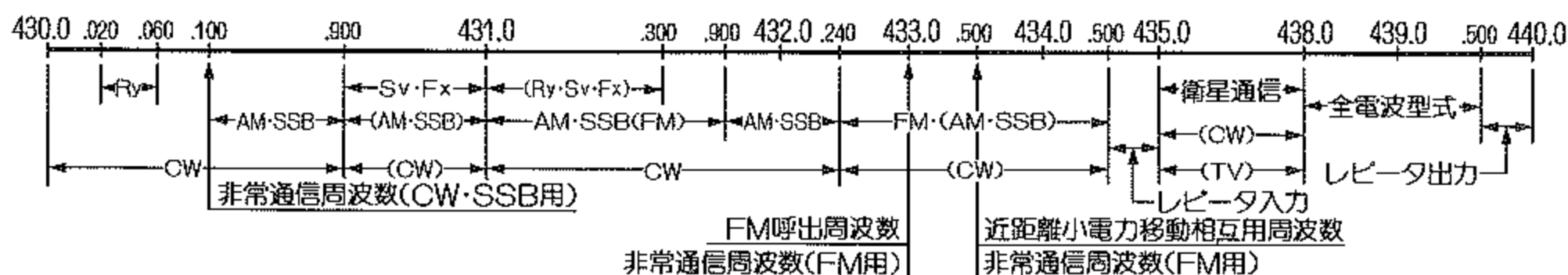
430MHz 帯においては、下表に示されているバンド使用区分がJARL（日本アマチュア無線連盟）によって制定されていますので、この使用区分にそった運用をお願いいたします。

運用の際には使用電波のルールや慣習に十分注意し無用のトラブルが生じないようにご配慮ください。

●電波型式の表示方法(定義)

- ①A1電波は、「CW」とする。
- ②A2、A3、A9(抑圧搬送波両側波帯に限る。)電波は、「AM」とする。
- ③A3A、A3J、A3H電波は、「SSB」とする。
- ④A5、A5C、A9(テレビ電波に限る。)及びA9C電波は、「TV」とする。
- ⑤F1電波は、「RTTY(Ryと略記する。）」とする。
- ⑥F2電波のうち、モールス符号を用いる電信によるものは「FM」、テレタイプによるものは「RTTY(Ryと略記する。))」とし、後者については使用区分表の脚注にその周波数帯を明示する。
- ⑦F3電波は、「FM」とする。

●JARL制定430MHz帯使用区分



- (注1) 431.900MHz～432.240MHzの周波数帯は、月面反射通信、流星散乱通信、オーロラ反射通信などに使用する。
- (注2) 431.000MHz～431.900MHz及び432.240MHz～434.500MHzの各周波数帯のFM電波の占有周波数帯幅は、16kHz以下とする。
- (注3) レビータ用入出力周波数帯の入出力周波数は、別に定める。
- (注4) FM系によるRTTY, SSTV及びFAXの運用は、431.000MHz～431.300MHz及び全電波型式の周波数帯を使用する。

- ⑧F4電波のうち、占有周波数帯幅が40kHz以下のものは「FAX(Fxと略記する。))」とする。但し、FM系によるものについては使用区分表の脚注にその周波数帯を明示する。
- ⑨F5電波のうち、占有周波数帯幅が40kHz以下のものは「SSTV(Svと略記する。))」とする。但し、FM系によるものについては使用区分表の脚注にその周波数帯を明示する。
- ⑩上記の電波にその他の電波を加えたものを、「全電波型式」とする。

●()内の電波型式

使用区分のうち、()内の電波型式については、これと併記された電波型式による通信に混信を与えないことが明らかな場合に限り使用できるものとする。

●表示周波数

- ①非常通信、ビーコン、FM呼出、及び近距離小電力移動相互用の各表示周波数は、搬送波周波数とする。
- ②①以外の表示周波数は、電波の使用区分の境界を表わしており、電波の占有周波数帯幅の上限または下限とする。

●FM呼出周波数における非常通信

連絡設定後は他の周波数に移り非常通信を行なうこととする。

運用方法

アンテナおよび電源コードの接続が終了したら、マイクコネクタに付属のマイク口ホンを接続ししっかりと締めつけてください。

- ・ OFF/VOL ツマミを回して電源を ON にします。周波数表示が **3.0 0 0** になります。
- ・ OFF/VOL ツマミをさらに時計方向に回すと、ノイズ音又は、音声が入ってきます。
- ・ 次に SQL ツマミを時計方向にゆっくり回してゆき、ザーというノイズ音が聞えなくなる所で止めます。
(時計方向に回しすぎないでください。又弱い信号を受信するときは、SQL ツマミを

反時計方向に回しノイズ音が聞える状態でご使用ください。)

- ・ これで準備完了です。メインダイヤル又はマイク口ホンの UP DOWN スイッチ等を使用して、任意の周波数に合わせて運用してください。
- ・ 送信するときは、運用周波数で他局に妨害を与えないことを確認してください。

マイク口ホンと口との間隔は3cm～5cmぐらいが適当です。特に外部雑音が多い場所では、マイク口ホンを口元につけてご使用ください。

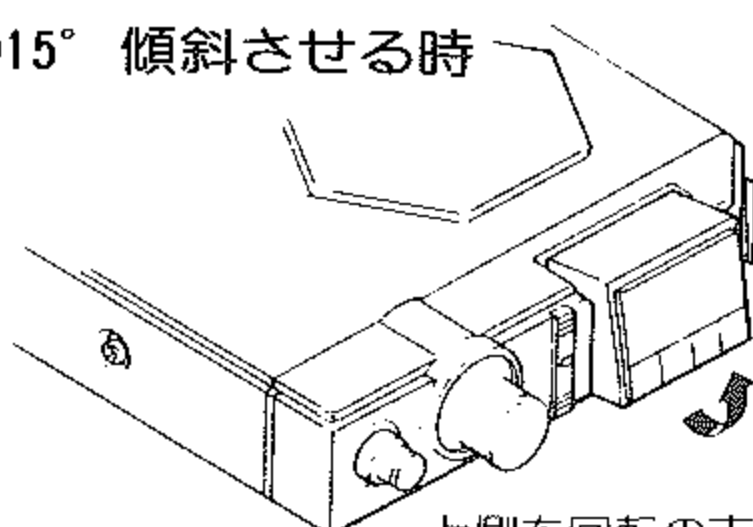
便利な使い方

周波数表示ブロックの回転機構について

周波数表示部分は上方向に15° 回転出来る構造となっております。この操作方法是下記の手順で行なってください。

注：とくに、もとに戻す時は、ロックされていますので、必ず、下側のローレット部を押しながら、もとに戻してください。

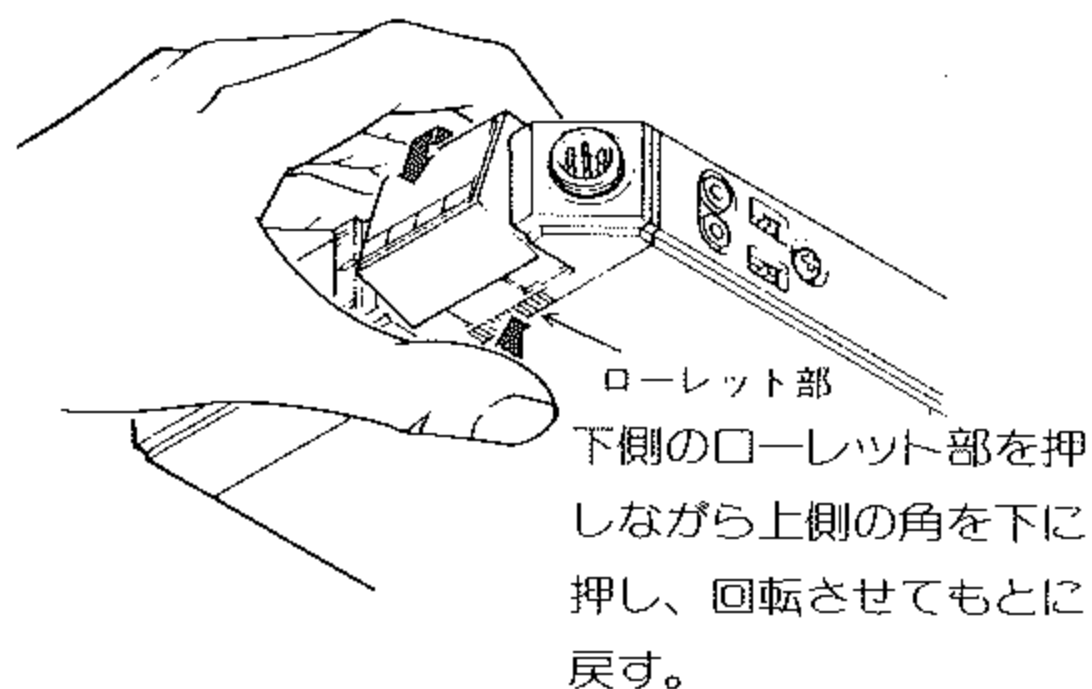
(1)15° 傾斜させる時



上側を回転の支点にして

(2)もとに戻す時

下側を前にひき出す。



ローレット部

下側のローレット部を押しながら上側の角を下に押し、回転させてもとに戻す。

CALLキーの使い方

1. CALL キーと SCAN/CCL キーを使うことにより 433.000MHz と 433.500MHz の二波と他の任意の一波を自由に呼び出すことができます。

例、周波数が 433.240MHz の場合

3.240



CALL

CALL キーを押す



3.00c



SCAN/CCL

SCAN/CCL キーを押す



3.240

433.240MHz がメモリー周波数の場合

MEMO

MEMO キーで呼び出します



3.240



CALL

CALL キーを押す



3.00c



CALL

CALL キーを押す



3.50c



SCAN/CCL

SCAN/CCL キーを押す



3.240

↑ 消える

たすきがけ運用

●受信周波数をシフトしたいとき

1. あらかじめシフト巾を、メモリーしておいてください。
2. MHz ボタンとロータリースイッチ又は、UP DOWN スイッチで、希望周波数に合せます。

2.360

3. RPTスイッチを、R1 側にします。
(シフト巾が、7MHz のとき)

9.360

4. プレストークスイッチを押しますと、“2”で合わせた周波数になります。

2.360

注：受信周波数は、送信周波数に対してシフト巾だけ加算された、周波数になります。
受信周波数がアマチュアバンドを逸脱した場合、周波数表示は、OFFになります。

例	シフト巾	7MHz
	送信周波数	434.000MHz
	受信周波数	アマチュアバンドを逸脱 します。(1MHz)
	周波数表示	

OFF

MHzボタン、ロータリースイッチ、UP-DOWNスイッチの操作で周波数をアマチュアバンド内に移動させるとOFF表示は消え通常の周波数表示になります。

●送信周波数をシフトしたい時

1. あらかじめシフト巾を、メモリーしておいてください。
2. MHz ボタンとロータリースイッチ又は、UP、DOWN スイッチで、希望周波数に合せます。

2.360

3. RPTスイッチを、R2 側にします。

2.360

4. プレストークスイッチを押して、送信状態にし、運用します。
(シフトの巾が 7MHz のとき)

9.360

注：送信周波数は、受信周波数に対して、シフト巾だけ加算された周波数になります。
送信周波数がアマチュアバンドを逸脱した場合、周波数表示は、OFFになります。

例	シフト巾	7MHz
	受信周波数	434.000MHz
	送信周波数	アマチュアバンドを逸脱 します。(1MHz)
	周波数表示	

OFF

この状態での送信電波は、発射されません。

レピーター運用について

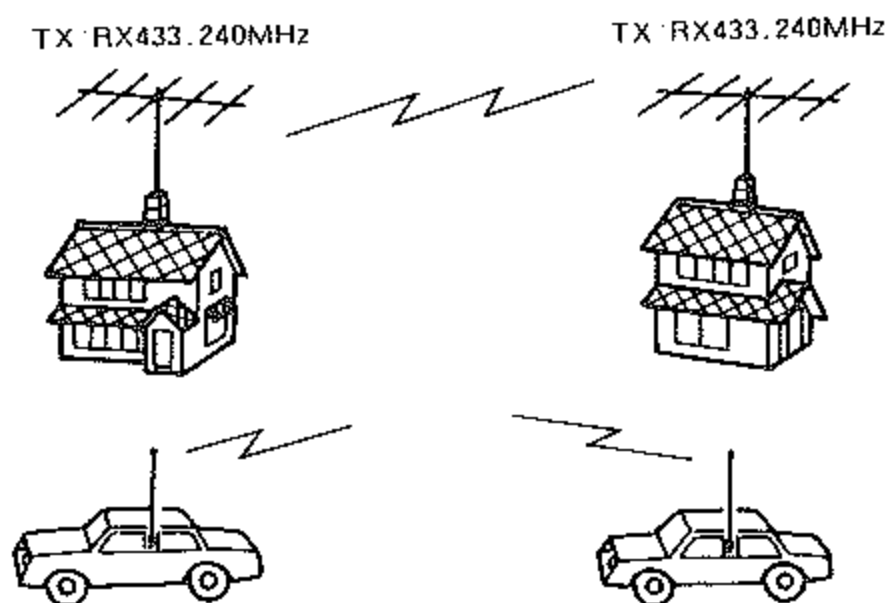
1.レピーター局とは

レピーターとは無線中継局の意味として使われています。

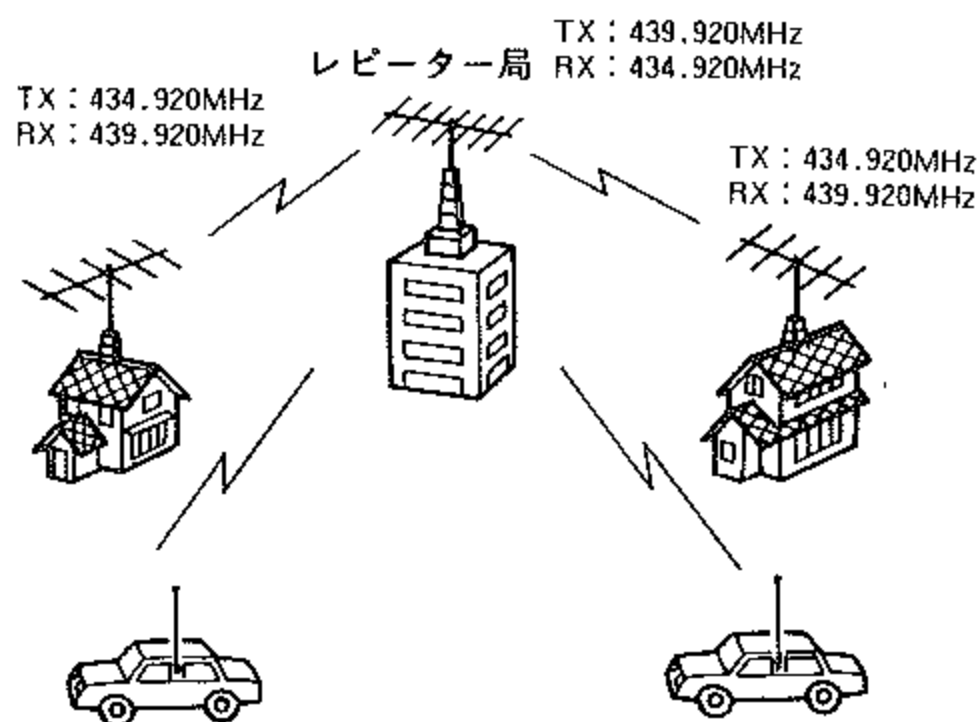
2.レピーター運用

① 2局間の交信を無線中継局を介して行うことを云います。

従来の運用



レピーター運用



②レピーター運用の特色

①無線中継局を介して送信・受信異なった周波数で交信します。又レピーター駆動用のトーン信号も必要となりますから、レピーターを運用するには、無線機もレピーター運用に対応できるものが必要になります。

②レピーター局の設備は、受信と送信が異なった周波数で同時に動作する機器および附属機器が必要になります。

③無線中継局を介して交信を行いますので、数ワットのRF出力の機器を使用しても遠くの局と交信が可能になります。

日本におけるレピーターについて

レピーターによる運用はレピーター局が開設されている地域のみが可能になります。レピーター局についての情報は各専門誌あるいは、日本アマチュア無線連盟発行の JARL NEWS等から得る様にしてください。

レピーター運用

本機では88.5Hz以外のトーン周波数を使って、レピータ運用を行う時は、別売の本機専用トーンエンコーダーCTN18 (レピーター駆動用回路)をお買上げ店、あるいは当社サービスステーションにて取付けてください。

注：地域によってトーン周波数が異なることがありますので、運用される地域やレピーター局を事前に調べておいてください。

：本機にはシングルトーンエンコーダー (88.5Hz)が内蔵されています。

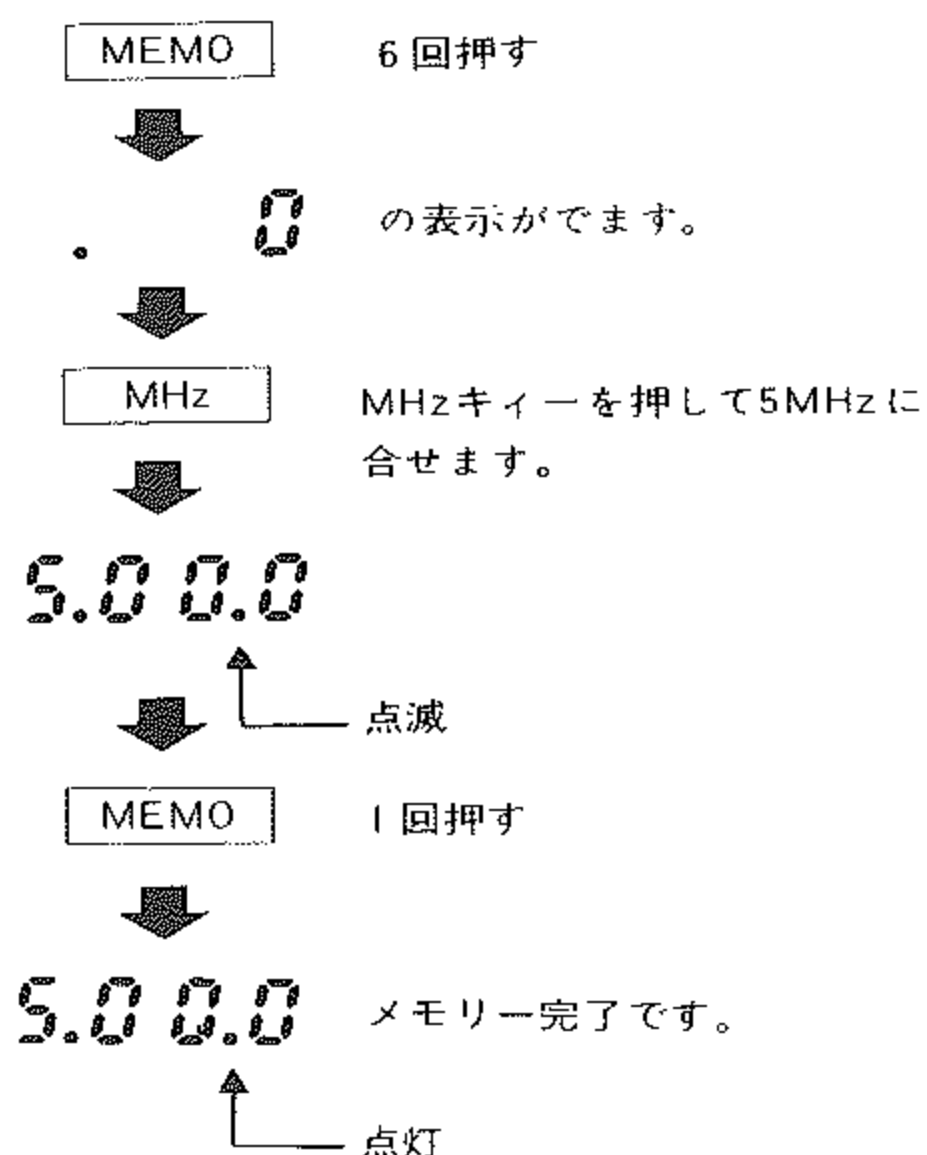
運用方法

レピーター運用を行なう前にレピーター局の受信周波数と送信周波数を調べ次の手順で操作してください。

ここではレピーター局の受信周波数（入力周波数）が 434.920MHz。

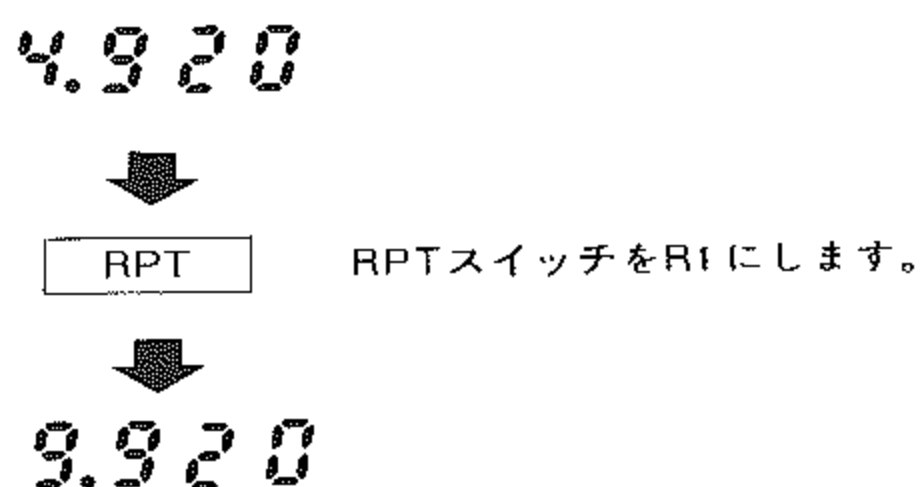
送信周波数（出力周波数）が 439.920MHz の場合を例として説明します。

1. MEMO キーを6回押してオフセット専用メモリーを呼び出します。



メモリー完了後は必ずSCAN/CCLキーを押してください。

2. RPT スイッチをSの位置の状態、メインダイヤル、MHz キーを用いて434.920 MHz にします。



これで準備はOKです。

マイクを持ち交信してください。

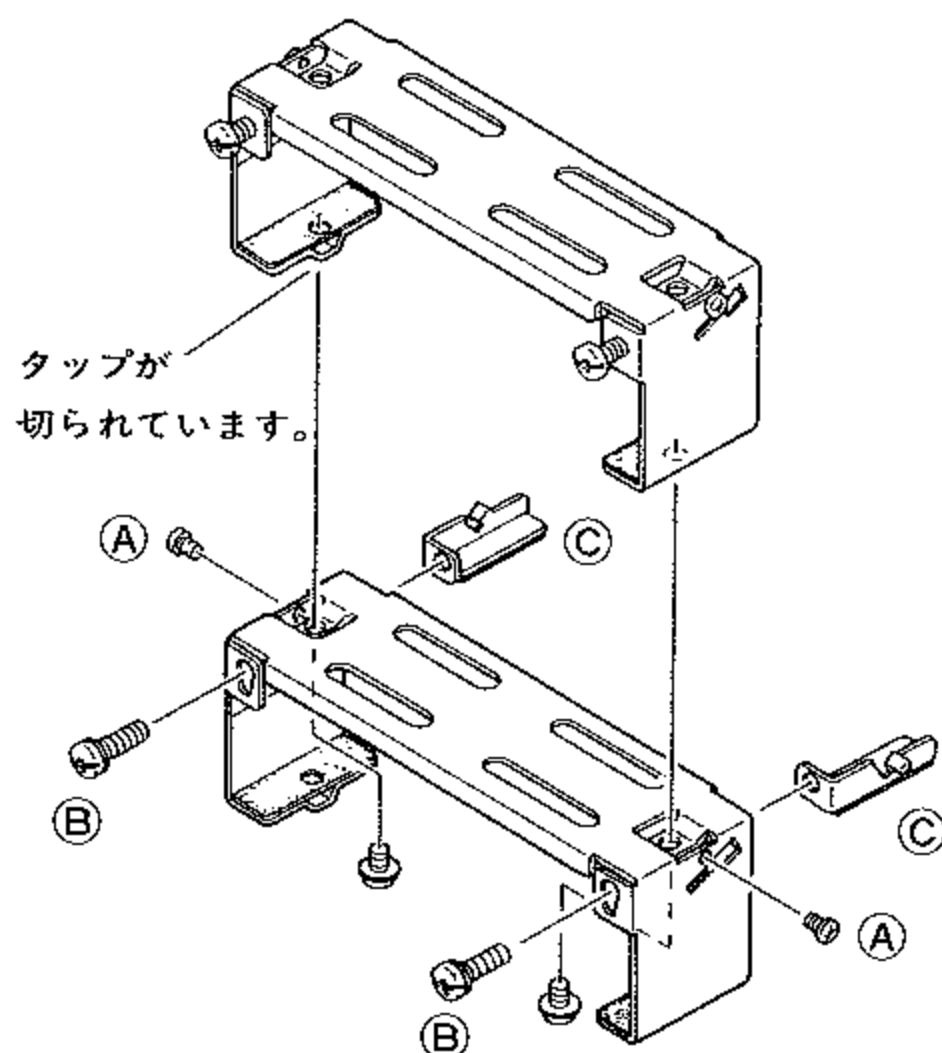
PTT スイッチを押すと、周波数表示が、**4.920** になり受信状態にすると**9.920** になります。

モービルブラケットの使い方

本機のモービルブラケットは2段重ねができるよう作られています。2段重ねをする下側のモービルブラケットのみ下記の作業を行います。

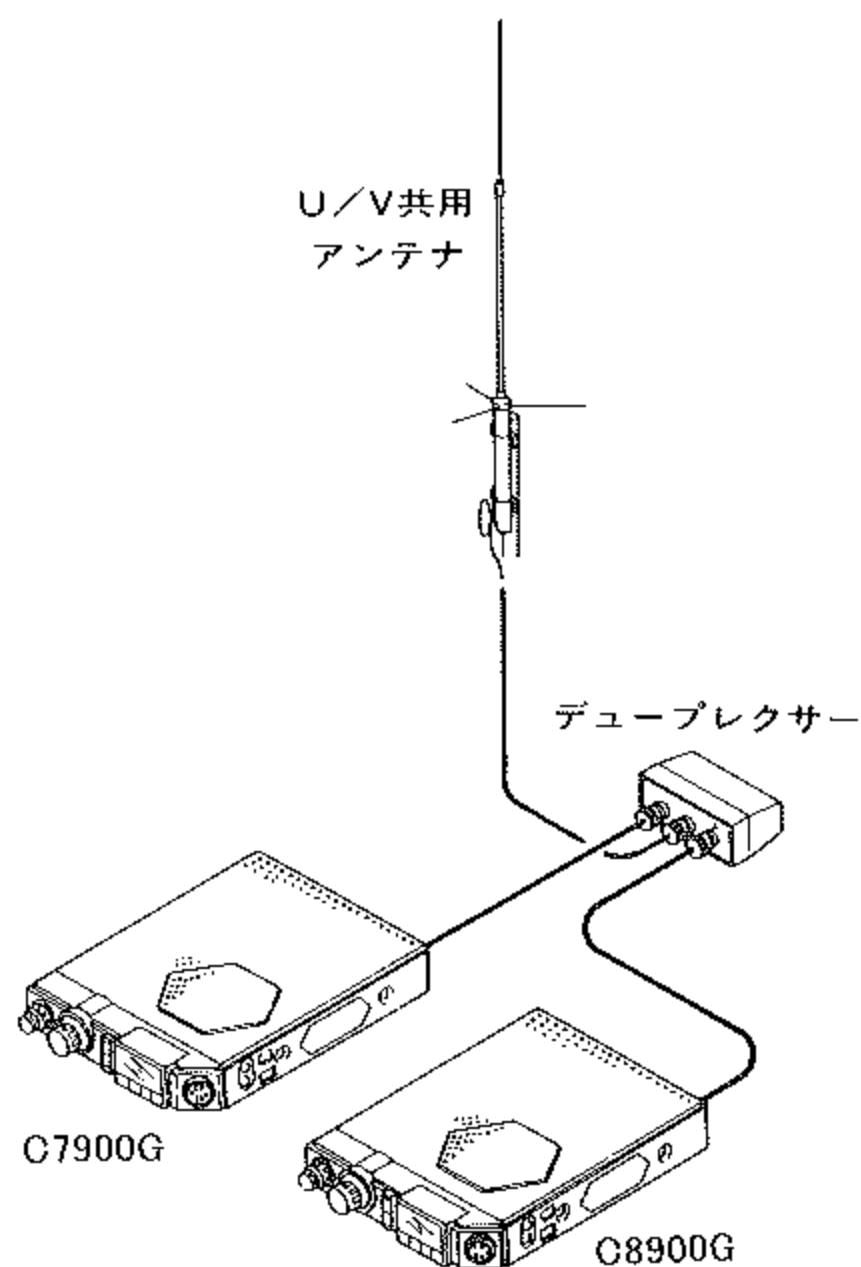
モービルブラケットの重ね方

1. モービル・ブラケット側面のビス(A)2本を外します。
2. モービル・ブラケット前面の本機固定用ビス(B)2本をユルメ外します。
3. 以上4本のビスを外しますと、本機押え金具(C)2ヶを取り外すことができます。
4. 本機押え金具を外しましたら、付属のワッシャー付黒ビスを図の様に通しドライバーで2つのモービル・ブラケットをしっかりと固定します。
5. 先ほど外したビス、本体押え金具を元通りに取りつけて、作業終了です。



同軸ケーブルの接続方法

UHF、VHFの共用アンテナで、C7900G、C8900Gを使って運用される時は図の様に、市販のデュプレクサーを介してC7900G、C8900Gに接続してください。



定 格

①一般仕様

送受信周波数	430～440MHz
電波型式	F ₃
使用電圧	DC 13.8V
消費電流	送信時3.4A 待受受信時0.4A
マイク入力インピーダンス	600Ω
低周波出力インピーダンス	8Ω
空中線インピーダンス	50Ω
接地方式	マイナス接地
寸法(幅×高さ×奥行)	138×31×178mm
重 量	1.1kg

②受 信

受信方式	ダブル・スーパーヘテロダイン
中間周波数	1st IF 21.4MHz 2nd IF 455kHz
受信感度	12dB SINAD -10dB ※(-16dBμ)
通過帯域巾	±7.5kHz(-6dB)
選択度	60dB以上
スケルチ感度	-16dB ※(-22dBμ)
低周波出力	2W(10%歪率、8Ω負荷) ※はJAIA測定法による表記

③送 信

送信出力	Hi-10W Low-1W
スプリアス比	60dB
最大周波数偏移	±5kHz
変調方式	リアクタンス変調

本機の規格および外観は改良のため予告なく変更することがありますのでご了承ください。

申請書の書き方

本機によるアマチュア無線局の申請には、市販の申請書に下記事項を記入し、間違いのないことを確認して申請してください。

(工事設計書)

区 分		第 1 送 信 機	第 2 送 信 機
発射可能な電波の型式 周波数の範囲		電波の型式 F ₃	電波の型式
		430 MHz 帯	MHz 帯
変調の方式		リアクタンス変調	
終 段 管	名称 個数	M57704M × 1	X
	電圧 入力	13.2 V 20W	V W
送信空中線の型式			
その他工事設計		電波法第3章に規定する条件に合致している	

- C7900GはJARL登録機種ですので、送信機系統図の記入を省略することができます。送信機系統図の欄にはC7900Gとご記入ください。

- 登録番号 S-34

第1送信系統図

- 送信型名 C7900G (日本マランツ)
S-34

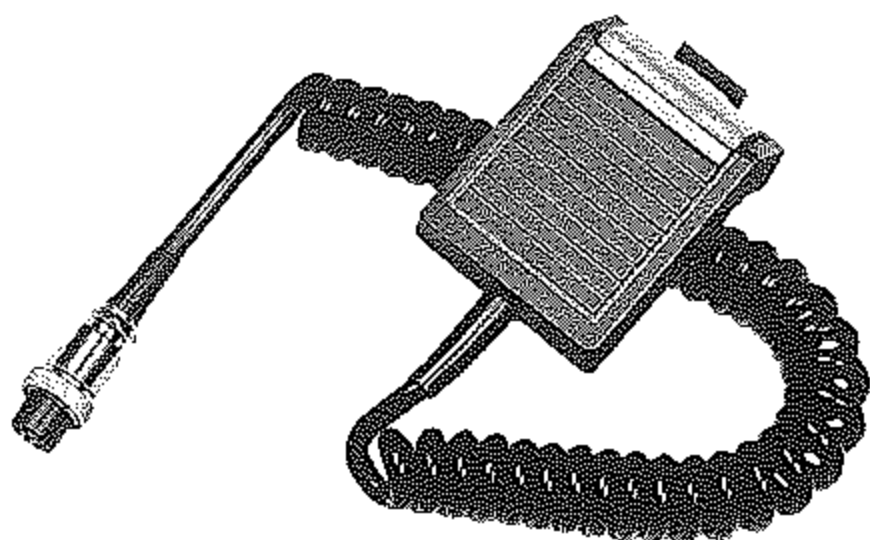
保証・アフターサービスについて

1. この商品には保証書を別途添付してあります。保証書は「販売店印・保証期間」をご確認のうえ、販売店からお受取りいただき、よくお読みの上大切に保存してください。
2. 保証期間はご購入日より1年間です。正常なご使用状態で、この期間内に万一故障の際は、ご購入販売店または弊社営業所で保証書記載事項に基づき「無償修理」いたします。

3. 保証期間経過後の修理
修理によって機能が維持できる場合は、お客様のご要望により有料修理致します。
4. 補修用部品の詳細・ご転居等アフターサービスについての不明な点は、ご購入販売店または別紙の弊社営業所に遠慮なくご相談ください。

主なアクセサリ

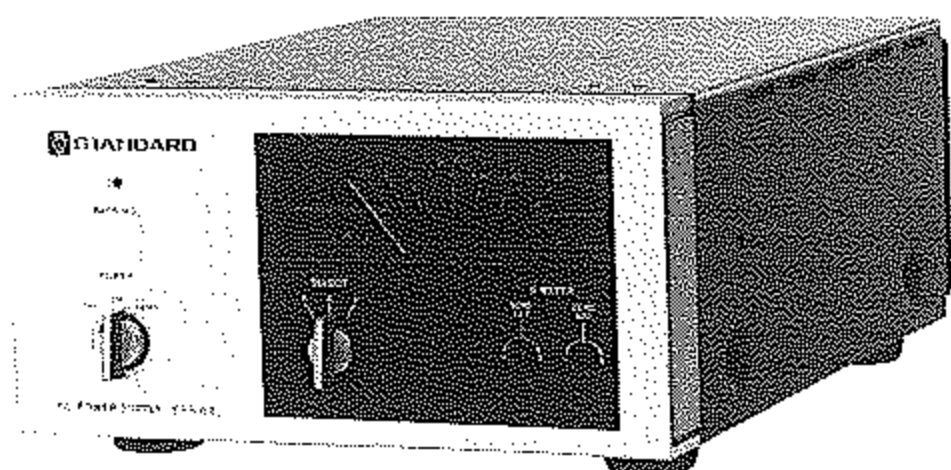
本機には次のようなアクセサリが用意されます。



・マイク／スピーカ MP736

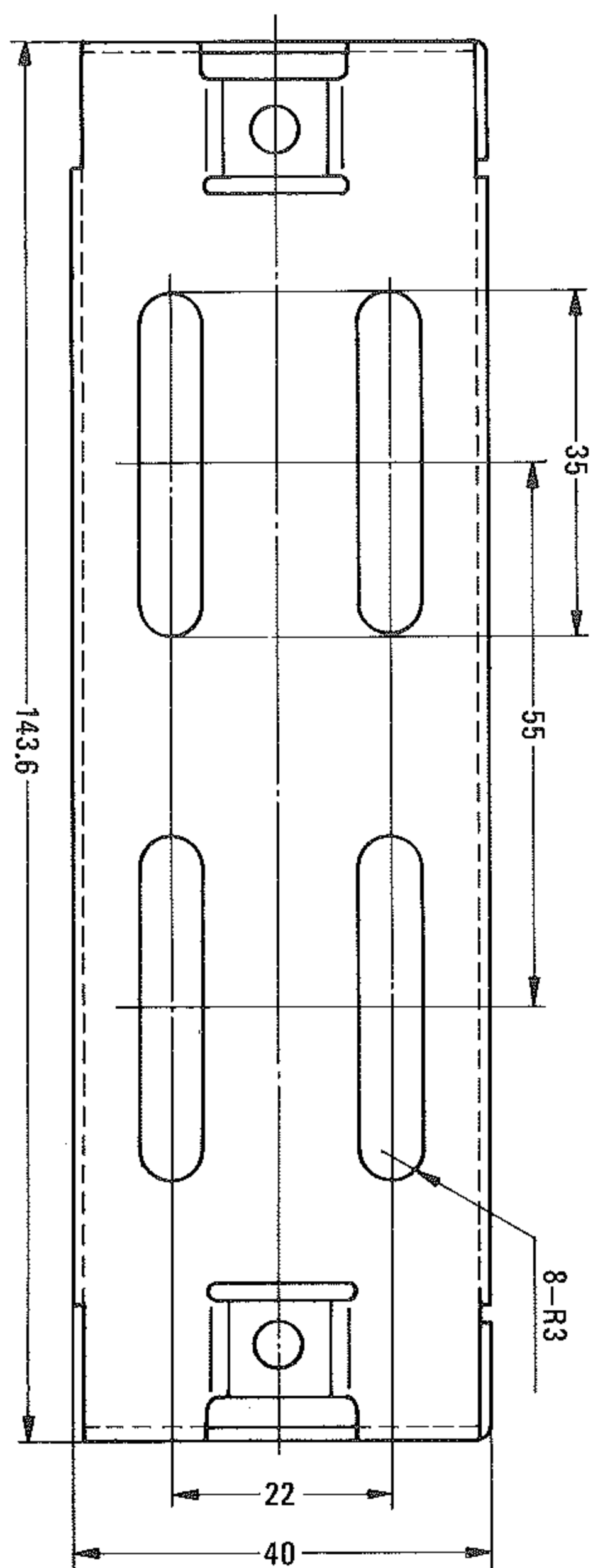


・外部スピーカ C207M

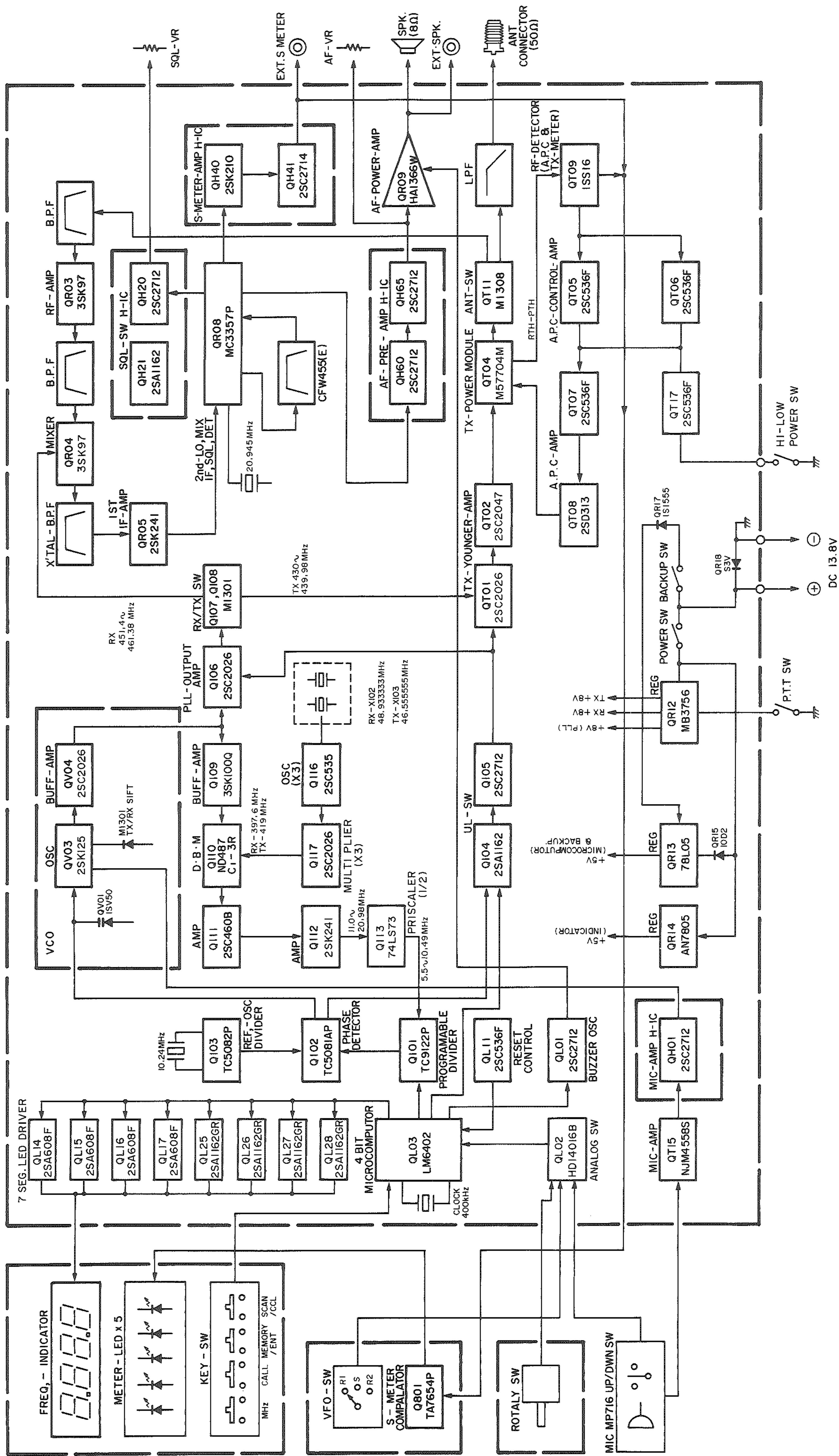


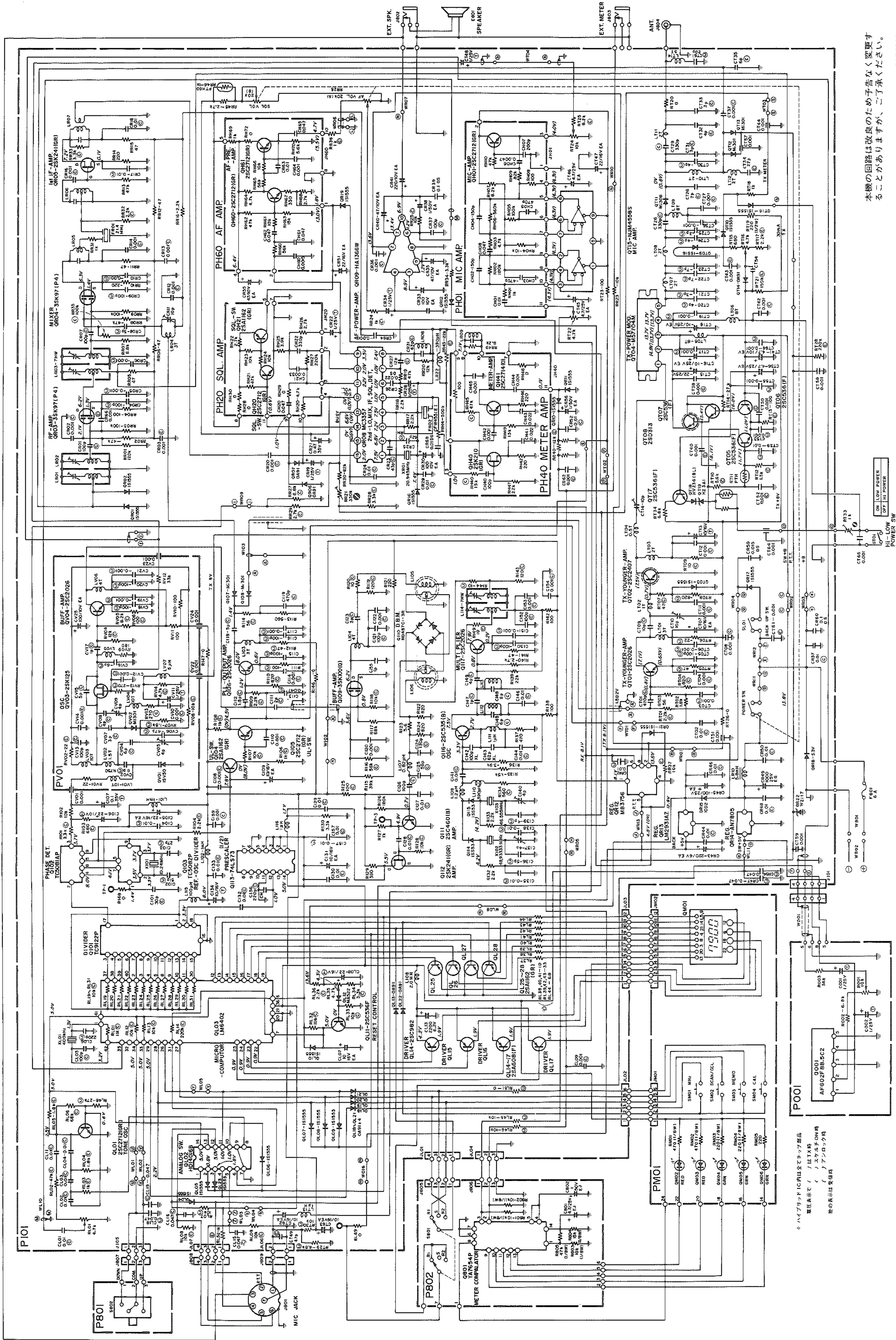
・定電圧安定化電源 CPS03

形紙としてお使いください。



BLOCK DIAGRAM





本機の回路は改良のため予告なく変更する
ことがありますが、ご了承ください。

日本マランツ株式会社

本 社 〒228 神奈川県相模原市相模大野7丁目35番1号
営業本部 〒150 東京都渋谷区恵比寿南1丁目11番9号

ご注意：お問合せは日本マランツ(株)各営業所で承っております
ので全国営業所一覧をご覧ください。